
不思議の国のドローレス

糸冬始

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のドローレス

【Nコード】

N7868J

【作者名】

糸冬始

【あらすじ】

少女は庭の芝生の上で、寝そべっていた。スプリングラーの水を浴びて、夏の光の中涼しげに。そして目の前の藪が揺れた。飛び出したのは、服を着て立って歩く、喋る白い兔。まるで御伽噺のような。しかし、少女の名前は「アリス」ではなく「ドローレス」だった。にやにや笑い猫は問いかける、「なあ、お嬢ちゃんの名前は、本当の名前は何かだい？」。――一部、微量ながら性的表現あり。別サイトで蛇足的な番外のみ更新中。――

Chapter 0 Late of two years (前書き)

この小説は「不思議の国のアリス」と下地として展開していきま
す。擬人化注意です。原作の流れに沿って物語が展開していきま
す。完全に同じではなく、少しずれている部分もあります。そこはあ
くまで下地という事で御容赦ください。

最後に、この物語の主人公はアリスではありません。少女が何者
なのか、が主題になってきます。暇な方は考えながら読み進めてみ
てください。

……正直、名前がうまく検索をかければネットで出てくる可能性
もありませんが。

Chapter 0 Late of two years

遅刻だ、遅刻だ！

遅刻したのは一体誰だ？

君はA？ それともL？

Chapter 0 Late of two years

スプリンクラーが回っていた。水しぶきを芝生にまき散らし、さらさらと微かな音を立てている。その光の中には、白いワンピースの少女。

十歳を少し過ぎた程の年ごろだろうか。少女は濡れるのも構わず、芝生にうつ伏せに寝転がって雑誌をめくっていた。モノクロの写真が水に濡れ、そのページを操る白く細い指もまたしつとりと濡れていた。

ゆらゆらとウェーブのかかった鈍く輝く茶色の髪は、水に濡れて輝きを放っていた。伸びるままに任せたその長い髪は、水を吸い服や肌張り付いている。頬づえをついた腕に絡みつき、白く細い喉にブロンドの流れが淡く光る。

ぱらりとページが捲かれて、またモノクロが覗く。髪と同じ色の長い睫は伏せられ、その青みを帯びた灰色の双眸はどこか眠たげで、どこか憂鬱気でもある。視線はモノクロの平面を彷徨うが、そこには明確な意図は感じられない。

その物憂げで落ち着いた表情とは裏腹に、ぱたりぱたりと足を上下させていた。ゆっくりとした足の動きに合わせ、ワンピースの裾は徐々に捲れていく。脹脛あしむねが顕ひわになり、白く窪んだ膝裏が覗き、太腿ふとももがちらりと姿を見せる。その奥までは窺う事は出来ないが、薄手のワンピースも水で肌に張り付き透けて、下着がうっすらと線を覗かせている。

さく、と柔らかい音がした。芝生を踏む音。母親だろうか。淡く黒い影が写真の上に落ちる。

「遅刻だ、遅刻だよ、アリス」

不意に、子供っぽい声が落ちて来た。

影に沿うようにして視線を向けると、小さな革靴が目に入った。小人が履くかのような小ささに目を丸くし、少女は顔を上げた。

そこにあっただのは、正装して懐中時計を片手に持った、白い兎。紅い目がきらきらと光り、少女を見つめる。

「二年、二年の遅刻だ。アリス、僕らのアリス」

「アリス……？」

「おいでよ、さあおいでよ、アリス」

兎は長い耳をゆらゆらさせて、小さな白い手袋をはめた手を差し出した。その紳士的で優雅な姿に、しかしどこか戯曲的でわざとらしい態度に、少女は唇の端に笑みを浮かべた。

「そうね、貴方は私を何処へ連れて行く気？」

「僕らの世界に、兎の穴の底に」

「……なんだか居心地が悪そう。それに、アイスクリームもチューリングガムもなさそうね」

ふう、とため息をついて見せると、白い兎はにやりと口を歪めた。小さな口から白い歯が覗き、口の端がくいと上がる。兎の顔であるのに、それは間違いなく歪な笑顔だった。

「お菓子が好きなら、お茶会をしよう。終わらないお茶会を」

「ガムはある？」

「どうだろう。ケーキと紅茶なら請け合いた」

「私はガムとジュースの方が好きよ。でも……」

家の中から、甲高い声が聞こえて来た。口うるさい母親の声。少女はそれを耳にして、くす、と笑みを浮かべた。それは妖精が微笑むよりも可愛らしく、悪魔が嘲笑うよりも狡猾な笑み。

「……ここよりは、マシかもしれないわね」

「アリス、ああ、僕らのアリス。……一緒に、兎の穴に落ちよう！」

「！」

スプリングラーが回っていた。水しぶきを芝生にまき散らし、さらさらと微かな音を立てている。その光の中には、モノクロの写真集が開かれたまま置かれていた。

と、庭に化粧をした女性が現れた。三十代半ばに差し掛かった程で、ブロンズがかかった茶色の髪がばさりと背中揺れる。端正な顔を歪め、醜悪なほどに赤い口紅を塗りたくった唇がわななく。

「ロー、ロー、返事をしなさいっ。どこに隠れているの!?!? ……」
ドローレス!!!」

半ば叫ぶような、甲高い声。だが芝生の上にも、スプリングラーの下にも、庭の何処にも少女は居ない。残された雑誌の上に、一匹の蝶が止まっているだけだった。

羽を揺らめかせて、惑わせるように、舞うように。ひらひら、ひらひらと。

Chapter 0 Late of two years (後書き)

サブタイトルは「二年の遅刻」。

結構、既に伏線はばらまいてあります。さーて回収できるかな。

Chapter 1 gallery Of door

開かない扉ドアと届かない鍵キー。

身体サイズは変わるが結果は変わらず。

扉の向こうへ、どうやって？

Chapter 1 gallery Of door

気付けば、ドローレスは穴の中を落ちていた。でもその速度はゆっくりで、まるで優しく下ろすみたいな落ち方だった。初めは面白くてはしゃいでいたが、いつまでたっても、何処にもつかない。

「退屈だわ。さっきの兎も、いつの間にかいなくなっちゃったし」
辺りを見回すと、食器棚や本棚が壁のように並んでいる。週刊誌や写真集が見当たらないので、ドローレスは本棚には見向きもしなかった。が、食品棚があれば、チューイングガムがないかちらりと覗いた。空っぽのマーマレードの瓶くらいしかなかったが。キャンディは漂っていたので拾ってみたが、嫌いなハツカ味だったので止めた。

ため息をつき、ふわふわと心もとなく翻るワンピースを押さえる。「いい加減、何処かに着ければいいんだけど。……あら」

不意に、下の方が明るくなり廊下が見えて来た。ドローレスの体はふわりと廊下に降りたち、白いワンピースの裾が膝裏をくすぐった。何時の間にか、服は乾いていた。

廊下の壁には、隙間なく扉が並んでいた。どれもこれも何所か違い、装飾の多い華美なものも地味な木の扉もある。大きな物もあれば小さな物もあり、金もあれば石もある。ただ一つ共通している事といえば、その全てには錠が付いていた事だ。

ドローレスは驚いて廊下の壁を、つまり扉を眺めた。これ程に多

くの種類の、そして一度にこんなに沢山の扉を見たのは初めてだったからだ。眺めながら廊下の先に目をやる。

と、長い廊下の先にあの兎が立っていた。ひげをぴくんとさせて耳をゆらゆらと揺らす。ドローレスを見つめ、小さな口を開いた。

「やあ、アリス」

「……今更だけど、私はアリスじゃないわ」

ため息をつきながら、吐き出すように言う。名前を間違えられるどころか、既にそれは別人の名前だろう。アリスアリスと連呼されるのは気が滅入る。

あの家から逃げ出したいがために兎についてきてしまったが、ドローレスはアリスではない。ローだったりローラだったりドリーだったりと愛称は様々あるが、ドローレスであってアリスではないのだ。

兎は首を傾げ、ルビー色の瞳を瞬かせた。心底不思議そうに、小さな口を再び開く。

「アリスは、アリスだろうか？」

「だから、私の名前はアリスじゃなくて……っ!？」

言い終える間もなく、兎は背を向けて駆け出した。さすが兎、というべきか、その足は速い。見る見るうちに小さな姿は小さくなっていく。慌ててドローレスも足を動かさず、ついでに口も動かさず。

「ちょっと、待って！ 待ちなさいよ!!」

ドローレスが言い終わるころには、兎は長い廊下を渡り切り、角を曲がって行ってしまった。息を切らしてドローレスも追いかけて、ようやく角に差し掛かり曲がる。が、ドローレスが視界の端に兎を捉えたところで、兎は小さなカーテンの向こうに姿を消した。

ドローレスは唇を尖らせて、カーテンに向かって歩き始めた。兎と違ってカーテンは逃げないし、走るのも面倒なのだ。

カーテンを捲ってみるが、当然のように兎の姿はない。代わりに、小さな小さな扉があった。人間が通るには非常識も甚だしい大きさで、兎が通るにはちょうど良い大きさといったところだ。

ドローレスも小柄な少女だが、当然これでは通れない。しかしおそらく、兎はここへ入っていったのだろう。

「おいでって言ったくせに、エスコートもしないのかしら」

と呟くが、それを聞くべき白く小さな姿はなく、ドローレスは一人ため息をついた。

ドローレスが振り向くと、いつの間にかそこには透明なガラスのテーブルが在った。先ほどまでは全く気付かなかった。否、もしかしたら、今この瞬間に現れたのかもしれない。そんな可能性さえ浮かんでくる。

テーブルの上には小さな鍵と、バスケットが入った小さなバケツトが置いてあった。バケツトには「私をお食べ」と書いてある。私とは、バスケットの事だろう。

「あからさまに、怪しいのよね。ここにきていきなりお菓子だなんて。でもお腹もすいてきたし……」

ドローレスは腕を組んでじつとバスケットを睨みつけた。着飾った兎が立ち上がって喋る世界だ、何があってもおかしくはない。それこそ、バスケットも喋り出したら堪らない。「私をお食べ！」とか。

「……あの兎は私を、というかアリスを歓迎してみたいだし、毒ってことはないと思うけど……どうしよう、食べちゃおうかな」

ひとしきり一人言を言っつて、ドローレスはバスケットを摘みあげた。そして、ひよい、と口に頬り込む。この際、毒でないなら良いと思うことにした。なかなかおいしかった。

もう一枚摘んで 異和感に気付いた。バスケットが大きくなっているように感じたのだ。今度は三口で食べ終わり、もう一枚を手に取りとうとする頃にはそれははつきりと自覚できた。

バスケットが大きくなっているのではない。ドローレスが小さく

なっているのだ。

さすがに身体の大きさまで変わるとは思わなかった。これからは不用意にお菓子を食べないようにしよう、と思つて、ふと思いついた言葉を零した。

「……………ケーキー切れで、お腹一杯になるわね」

元の身長のおよそ四分の一よりも少し小さい、25センチほどまで縮んだところで、その奇妙な変化は終わった。ドローレスは服も一緒に縮んでいることに安堵し、テーブルを見上げた。

「さて、どうしようかな。鍵は置いてきちゃったし。こんなことから、扉を開けてからビスケットを食べれば良かったわ」

という物の、言葉ほど深刻に困っている訳ではない。小さく去つた所為か、ちょうど今のドローレスの背丈ならば軽くかがめば鍵穴が覗けそうなのだ。扉の向こう、白兔が走つて行つた世界はどんなところなのか、気にならないわけがない。

扉に近づいて背を曲げ、片目をつぶつて鍵穴の向こうを覗いてみる。と、その小さな穴の向こうには輝くような光景が広がっていた。僅かに隙間から見える光景だけでも、母が自慢する庭とは比べ物にならない。しっかりと手入れのいき届いた木々は、暖かい色の石畳の道に影と光を落としている。丁寧な細工の施された噴水では、冷たいと触らずともわかるダイヤモンドのように煌めく水が噴き上がっていた。眩いほどに色彩が溢れて、花々の咲き乱れる花だん。そこに舞い踊り飛ぶ、様々な種類の美しい蝶たち。

「綺麗……………」

思わず口から言葉が零れ、感嘆の息が漏れる。あの石畳を歩いて、花を眺める事が出来たらどんなに素晴らしいだろう。映画のワンシーンのようで、きつと楽しいに違いない。

しかし鍵には手が届かず、他の出入り口などわからない。今度は絶望に息を吐き、困つたわね、と一人で呟いた。が、思わぬところから答えが返つて来た。

「ありす」

「え？
キヤあしー？」

Chapter 1 gallery Of door (後書き)

タイトルは「扉の回廊」。美術館の絵のように扉が並んでいるイメージです。

話の展開に面白みがかけているとは思いますが、如何せん主人公がキヤーキヤー言うタイプではないのです。最初のうちはかなり展開が早いかと思われれます。

感想、批評などと下さると、糸冬は小躍りして喜びます。

Chapter 2 into Wonderland

ドロー
愚鈍な鳥は彼女と走る。

終わりと始まりと結果のない競争^{レース}で。

辿りつく先、それは何処？

Chapter 2 into Wonderland

いつの間に現れたのだろう、不格好な姿の鳥が背後に立っていた。嘴は大きく、少し曲がっている。どこかひょうきんな顔は鳩のような、しかし雉にも似ている身体つきだ。羽はあるが小さいし、身体もずんぐりとしている。これでは飛ぶことは出来ないだろう。その代わり、足はしっかりとっていて速そうだ。

「あ、貴方、誰？」

突然現れた見知らぬ鳥に、ドローレスはつつかえながらも尋ねた。どうやら喋れるようだし、話の通じない相手ではないと思いたい。

「ドードーどり。ようこそあります、ふしぎのくにへ」

「ドードー鳥、さん？」

さん付けをするか否かを少し迷いながら、ドローレスが聞き返すと、こつくりと縦に首が動いた。どうやらさん付けで良いようだ。ちよつと迷った後、ちゃんと訂正しておくことにした。

「ええと、私はドローレスよ」

「……………？ あります、ちがう？ おんなのこ、あります」
「……………」

もしかして、ここでは女の子なら皆アリスと呼ばれるのだろうか。だとしたら面倒な話だ。というか訂正の仕様ががない。

「……………もう良いわ。アリスでもなんでも。それで、貴方はどうして私に話しかけて来たのかしら」

「あります、つれていく、ふしぎのくに」

「ここは、不思議の国とやらじゃないの？」

兎や鳥が喋ったり、ビスケットを食べて小さくなったり、十分に不思議な気もするが。ドードー鳥は首を傾げ傾げ、ゆっくりと嘴を開いた。

「ここは、いりぐち。まだ、ちがう、……と、おもう」

「曖昧ね。まあ、良いわ。ここに居てもどうしようもないもの。さしあたっては、その不思議の国とやらに行きましよう」

にやりと笑いながらのドローレスの言葉に、ドードー鳥は小さな目を細めて嘴を小さく震わせた。その仕草はやはりどこかひょうきんで、微笑んでいるように見える。もしかしたら本当に笑ったのかもしれない。兎だって笑っていたのだ。

ひよこひよこドードー鳥は近づき、首を下げた。ドローレスの足元に頭を垂れるような仕草に眉をひそめる。スカートの中を覗かれたりはしないと思うんだけど一応、と注意を払い、足を一步下げる。と、

「ひゃあああああっ!?!」

ぐうん、と首が上がり、身体が目がぐるりと回る。ドローレスは気付けばドードー鳥の背中に居た。柔らかな羽毛に座り込み、暴れる心臓を落ち着かせて唇を尖らせる。

「いくらなんでも、レディにする行動とは思えないわね」

「ありす、くび、つかまる。はしる」

「え? ……っ!」

ドードー鳥の言葉が終わるや否や、風が頬を打った。物凄いスピードで走り出したのだ。慌てて首に腕を回して、羽をぎゅっと掴む。馬にまたがるように、ドードー鳥にまたがって走る日が来ようとは思わなかった。

周りを見る余裕も無い。振り落とされないように必死になって羽を掴み、下を噛まないように切れ切れに呼びかける。

「ねえ、ドードー鳥、さん。もう少し、ゆっくり、行けないのかしらっ」

「ちこく。ちこく。にねんのちこく」

「遅刻……？」

そう言えば、白い兎もそんなことを言っていた。二年の遅刻だ、と。

遅刻だなんて言われても、ドローレスはここに来る予定はなかったはずだ。それなのに遅刻。それも二年もと言われてもぴんとこない。随分と大規模な遅刻もあつたものだとは思うが。

二年前、なにか約束でもしたかしら、と考えてみるが、二年前と言えばドローレスは十歳だ。二年も待たせても達成しなければいけないような約束など、していなかった気がする。

「……実は、人違いでした、じゃ、ないでしょうね……」

アリスじゃないし。

ドローレスだし。

益体もない事をつらつらと考えていると、いつの間にかドードー鳥の足音が爪で掻く堅い音ではなくなっていた。ぐらつく視界で足元を見れば、廊下の堅い床ではなく、所々に小石が転がり草の生えた地面。

驚いて視線を上げると、壁も扉も天井も無くなっていた。いつの間にも外に出たのだらう。見渡す限り、何と云うか、マザーグースに出てきそうな風景が広がっている。草原、森、その間を駆け抜ける小道。遠くに見えるあれは農場だらうか。

いつまでこうして走るのだらう、とドローレスが考えていると、不意にドードー鳥の足が緩やかになった。だんだんとゆっくりになり、遂には止まって座り込んだ。降りろという事だらうか。

ふわふわな羽を滑らないように慎重に下りて、ドローレスはドードー鳥に向き直った。一応、お礼を言うべきだらう。随分長い事乗っていた気がする。

「ありす、あげる、これ」

「え？」

つん、と大きな嘴で差し出されたものは、可愛らしい小さなポシ

エットだった。困惑しながらも受け取り中身を見てみると、小さな瓶が入っていた。ラベルには「私をお飲み」と書いてある。

ビスケットを彷彿とさせる言葉だった。また大きさが変わるのだろうか。一応、ドードー鳥に聞いてみようと言葉を上げると、ドードー鳥は小さな目を細めて嘴を震わせた。

「それじゃ、また、ね」

「え……？」

ドローレスがどういう事が問い詰めるよりも早く、ドードー鳥の足が動いた。見る見るうちに速度を上げ、あっという間にその姿は小さくなっていく。ぽかんとするドローレスをその場に残し、走り去ってしまった。

ドローレスは驚きと困惑の後、手の中の瓶を見た。開けてみて匂いを嗅ぐと、甘酸っぱいお菓子のような香りがする。フルーツジュースのような匂いだ。

ビスケットの前例で言うなら、間違いなくこれは大きさが変わる何かなのだろう。問題はそれが、大きくなるのか小さくなるのか、だ。ラベルには「私をお飲み」としか書かれておらず、成分も用法も用量も効用も書かれていない。

「全く、不親切ね。せめて大きくなるか小さくなるかだけでも書いてくれないかしら」

普通は食べたり飲んだりしただけで身体が伸びたり縮んだりはないが、ここではそれが当たり前のように感じる。それが、不思議の国。常識は非常識^{ファンタジー}で、日常は非日常^{メルヘン}。

開けてみて、そっと、ほんの少しだけ口に含む。思った通り、さっぱりした酸味と甘みのあるジュースのようだ。思わず二口目を飲んでしまいたいのを押さえ、口を離す。大きさがどう変わるにせよ、あまりに突拍子もない大きさになるのは嫌だ。

さてどつちかな、と身体を見下ろすと、地面が急に遠く離れた。くら、と眩暈がおそい、慌てて体勢を立て直す。ぐんぐんと地面が離れ、目の高さまであった草花が小さくなっていく。どうやら大き

くなっているようだ。

数秒でその変化は終わり、ドローレスは自分の体をじつくりと眺めた。服やポシエットも体に合わせて大きくなっており、手に持った瓶も小さくなっていない。しばらく考えてみて、元々の145センチに戻ったのだとほっと胸をなでおろした。これなら、人に会っても大丈夫だろう。

ドローレスは少し考えた後、瓶に蓋をしてポシエットの中に戻した。また何かあって小さくなった時に役に立つだろう。

ポシエットを肩から提げて、どうしようか、と考えながら辺りを見回す。と、ドローレスの立つ道の先に家が見えた。こじんまりとした可愛らしい家で、小さな庭も付いている。さしあたってする事もなく、行く場所もない。

家に向かって歩き出しながら、今度は一体どんなびっくり動物が出てくるのかと、ドローレスは期待と不安に胸を膨らませた。

Chapter 2 into Wonderland (後書き)

タイトルは「不思議の国の中へ」。そのまんま。

……三日連続で更新してどうしようというのだ自分……。
感想・批評など下さると、糸冬は狂喜乱舞します。

Chapter 3 rabbit's house

追いかけて、追いかけて。

ルビー
アリス
紅の瞳は少女に釘付け。

どうして、君は逃げて行く？

Chapter 3 rabbit's house

家に向かって歩き続ける事数分、ドローレスは家の前で足を止めていた。予想をはるかに超えたびっくりが待ち受けていたのだ。

すらりとした、背の高い男がいた。正装に身を包み、くるくると手の上で懐中時計を玩んでいる。髪は曇りない白で、うなじで小さく束ねてあった。ドローレスを見つめる瞳は、ルビーのような紅。

紛う事なき美形だ。俳優になれば一躍スターになる事間違いない。少女たちのあこがれの的となり、彼が今のように微笑めば数多の心が奪われるだろう。

その眼が、今と違って、笑えばの話だが。

にこ、と彼は口の端を釣り上げている。目を細めるその表情は確かに笑顔なのだが、どこか作り物めいた印象を受けた。

「ようこそアリス、不思議の国へ」

声も耳触りの良いバリトン。だがそれもまた表情のように、どこか無機質でぎこちない。口調は柔らかく滑らかなので、その差が余計に引っかけかりを覚える。

「貴方……誰？」

ドローレスの言葉に、彼は表情はそのまま首をかくんと傾けた。正直、不気味だ。まるで人形のような仕草だが、やっている本人は酷いなあ、と変わらぬ声色で続ける。

「さつき逢ったじゃないか、アリスは忘れん坊だなあ」

「会ったって……」

「私は、白兔だよ」

兔、白兔。正装、懐中時計、ルビーの瞳。

改めて彼の姿を見ると、確かにあの兔と同じデザインの服を着ている。髪が白いのも、白兔だから、なのだろうか。流石に頭上に兔の耳が生えていたりはしなかったが。男性のバニー姿など見たくない。彼の姿を上から下まで往復して眺め、ドローレスは何とも言えずため息をついて零した。

「…………… 本当に何でもありなのね、不思議の国とやらは」

「不思議の国だからね、アリス、何でも起こり得るのさ」

にこにこ笑顔のまま、ルビーの瞳はじっとドローレスを見つめる。何となく居心地が悪くなり、ドローレスは話題を変えようと家を見上げた

「ここは、貴方のお家？」

「そうだよ、白兔の家。あがっていくかい？ いや、アリスならば上がるべきなんだよ」

「え？ ちょっと……っ！」

さり気ない動きで手を取られ、ぐい、と思いの外強い力で引つ張られた。ドアが目の前で開き、くるりと踊るように、白兔の腕の中で回される。ドローレスが目を回しかけて瞬きした頃には、身体はちよこんと椅子に座っていた。いつの間にか、ポシエットも外されて白兔が持っている。スリも顔負けの離れ業だった。

「メアリアンにお茶を入れさせよう。甘いお菓子も用意させるよ。」

アリス、ゆっくりしてくれ」

「え、ええ……」

白兔はドローレスの向かいに座り、相変わらずにこにこしたまま、紅い眼を閉じもせずドローレスを見つめている。居た堪れなさにそっと視線をそらして、ついでに身体もずらす。が、白兔の眼はくり、と動いてドローレスを追いかける。これはなんなのだろう、彼の眼は瞬きもしないのだろうか。

奥でカチャリカチャリと堅い音がする。メアリアンとやらがお茶を用意しているのだろう。が、こちらには沈黙しかない。白兔はただ黙ってドローレスを見つめており、ドローレスもこんな男相手に何を話せばいいかさっぱり分からない。

メアリアンさん、早くして、と内心で祈る。そして出来るなら紅茶よりもジュースが良いわ。さらに言うならビスケツトは出さないで。さつき食べたなら縮んだ嫌な思い出が在るし。

不意に、弾けるような金属音が鳴り響いた。が、そのメロディは不思議の国には似つかわしくない、どこかロック調のファンキーな曲だ。目を丸くするドローレスに構わず、白兔は懐を探り懐中時計を取り出した。どうやら音源はそれのようだ。全くもって本当に似つかわしくない。

白兔は愁いを帯びた顔で時計を見つめた。ぱちん、と何か操作をするに似たたましいメロディは止まり静寂が戻った。そして、ぽつりと抑揚のない声で呟く。

「お呼びだ」

「え？」

「女王様がお呼びだ。白兔は出掛けなくてはならない。アリスと一緒にお茶会が出来ない」

嫌そうな顔で、ぶらぶらと懐中時計を揺らしながら立ち上がる。

お呼びだ、お呼びだ、と拗ねた口調で繰り返す様子は、遊びを中断された子供のような。ぶつぶつと繰り返しながら、白兔は扇子と手袋を持ってドアに向かってふらふらと歩く。そしてくるり、とドローレスの方を振り向き、唇を尖らせて不満そうな顔で言った。

「待っていて、アリス。すぐに帰ってくる」

「え、ええ。いつてらっしゃい」

「……いつてくるよ、アリス」

白兔は、はあ、とため息をつき、ドアを開いた。そしてドローレスの目の前で、くるりと姿が反転し　小さな、白い兔になった。

驚くドローレスをちらりともう一度見て、白兔は「……遅刻だ」

と呟き走り出した。さすが、やはり速い。

ドローレスはしばらく硬直したまま驚きを持続させ、はぁ、と息をついた。左右を見て誰もいないか確認し、白兔が戻ってくるかどうかドアを見つめた。ドアは動かない。

「……………さてと、」

立ち上がり、こともなげにドローレスは呟いた。

「逃げましょう」

特にこれといった根拠が在るわけではないのだが、このまま白兔の帰りを待っていたら危ない気がしたのだ。お茶を用意してくれているメアリアンには悪いが、さっさと逃げさせてもらおう。いつ、白兔が帰ってくるか分からない。

白兔に悪いかしら、という考えが脳裏をかすめたが、あの紅い目で見つめられ続けるのは結構つらい物がある。もっと柔らかく笑っていたら、顔は良いのだし格好がつくのだが。紅い目は全く笑っていないのだから怖くもなる。

ドローレスは迷いを振り切る様に首を振り、ドアに歩み寄った。ドアノブに手を伸ばし

がちゃ、という堅い感触があるだけだった。

「……………」

いつの間に鍵をかけたのだろう。

Chapter 3 rabbit's house (後書き)

サブタイトルは「兎の家」。なんの捻りもありません。わりと淡々としたタイトルが好きなので。

今のところ、どの程度の方が固定で読んで下さっているのか定かではありませんが、ドローレスの正体は通じる方がいるのでしょうか。感想等で「答えわかりました!」と言って下さると糸冬は大変喜び舌打ちします。

……いや、全員に通じないのも全員にばれちゃうのも、小説としては駄目でしょう? (苦笑)

ただの感想・批評なんかを送ってくれても、歡喜に咽びます。

Chapter 4 Trap built with sugar

何度陥つても結果は一つ。

砂糖シュガーとサンドスパイススライスな素敵な物。

今度はどんなスウィーツ畏だ？

Chapter 4 Trap built with sugar

何となく白兔と居るのが危険なんじゃないかという気はしていたが、手の中の堅い感触にそれは確信に変わった。しかも良く見たら内側から開閉できないタイプだ。外出するにしても、お客と女中メイドを置いて鍵をかけるというのは作為的すぎる。

まるで、ドローレスを閉じ込めようとしているかのような。

嫌な想像に、思わず眉間に皺が寄る。兎だからと油断していたが、冷静に考えれば年上の男性の家に閉じ込められているのだ。不思議の国に常識を持ちこんでも馬鹿げているが、警戒はするべきはずだ。ため息をついて玄関から離れ、台所らしき方向へ進む。メアリアンとやらなら、別の出入り口も知っているだろう。

それも駄目なら、どこか一階の窓から出るしかない。大した高さでもないだろうから、怪我もしないだろう。そっちも鍵がかかっていた場合は

「……割つても、正当防衛よね」

ドローレスは些nextか暴力的選択肢を真剣に考えながら、台所へと続くであろうドアを開けた。

ふわ、と甘い香りが鼻孔をくすぐり、ドローレスの心が浮足立つ。なんだかんだ言っても12歳、甘いお菓子には逆らえないのだ。見回せば、トレイの上には紅茶とショートケーキが二人分、並べられていた。

そして誰もいなかった。

「……………え」

女中^{メイド}消失、という想像を上回る自体に、間の抜けた声が漏れる。が、今はそれよりもケーキに目線が釘付けだ。チューインガムが一番好きだが、ケーキだって大好きだ。女の子はお砂糖とスパイスと素敵なもので出来ている、と誰が言っていたし。

そわそわしながら近づくと、尚更美味しそうに見える。生唾を飲み込み、辺りを見回した。当然誰もいないし、ドローレス以外は物音一つしない。

これはもう、食べるしかない。

この家を脱出しなければならぬが、別にその前にちよつとお菓子を食べたっていいはずだ。いっぱい歩いたから小腹もすいているし、誰にも責められないだろう。第一、ここに置いてあるということは、これはドローレスに出されるはずだったケーキなのだ。だったら食べるのは当然のことである。

フォークを取り、その銀色の輝きを白い生クリームの中に落とし入れて行く。スポンジの感触と間に挟まれた苺の感触に、ドキドキと高鳴る胸を押さえられない。唇を開き、そつとその中に白と赤の宝石を含ませる。

舌の上に広がる濃厚なまでの甘みに、ドローレスは幸福^{しあわせ}なため息をついた。誰だろう、ため息をついたら幸せが逃げるなんて言ったのは。幸せすぎてため息が出るって言うのに。

もう一口、と手を伸ばそうとした時、妙な違和感に気付いた。やけにトレイが近くに見えたのだ。そんなに近づいたっけ、と思うより先に、ぐんぐんと今度は遠のいていく。上に。

そしてドローレスは思い出した。ビスケットという甘い罫の前例を。

既に掌サイズとなったドローレスはああ、と深いため息をつき、呟いた。

「トレイの上に乗っていれば……………」

ケーキ一切れで、お腹一杯になれたかもしれないのに。

とにかくこうなったら、意地でもこの家を抜け出すしかない。ドローレスは立ち上がり、ある物の存在を思い出した。あの親切で優しいドードー鳥がくれた瓶だ。あれを飲めば、元の大きさに戻れるはずだ。

ドローレスはとっておいて良かった、と安堵し、腰のポシエットに手を伸ばした。否、伸ばそうとした。

ポシエットが在るべき位置には何も無い。一瞬でパニックに陥るが、ドローレスはポシエットの行き先を思い出した。

そういえば、家に入った時に白兔に取り上げられたのだ。スリも驚きの、一瞬の離れ業で。

「……やるわね白兔……」

ケーキを無断で食べた事は自業自得なのだが、そこは気にしない。今や小さく縮み、元の十分の一も無くなってしまった。周りに置いてある物から察すると、7センチ程度だろうか。きよろきよろと周りを見回し勝手口を見つけて、ドローレスは唇を尖らせた。

「鍵がかかっている良いんだけど。……その前に、今の私じゃ開けれそうにないわね」

ため息をついて、とりあえず扉に向かって歩く。近づいてみると、扉の下の隙間からなんとか出れそうだ。小さくなりすぎても、なんとかなるものらしい。

体を地面に擦りつけながらようやくと、ドローレスは家の外に出た。ケーキが惜しいが、そうも言っていられない。白兔が帰って来ないうちに、なるべく遠くに行くとしよう。

ドローレスは服に付いた土を払い、家の裏から続く道を歩き始めた。その道の先を見やると、森へと続いている。

「さて、あそこでもう少し大きくなれる何かを食べれると良いんだ

けど。流石にこの大きさじゃあ、踏みつぶされても文句が言えないわ」

独りごちて、ドロレスはため息をついて歩き始めた。

ため息をつくとき幸せが逃げると言った人は、どうやら正しかったようだ。

サブタイトルは「砂糖でできた罠」。

今回は話の都合上、少し短めです。身があるようでないような話ですが、つなぎなので許して下さい。でも、一番かわいい内容になった。

次回で一応、ストック終了となります。そして最大のヒントの提示終了。正解者出るといいなあ。

感想・批評等下されると、糸冬は叫びだして笑いだすほど喜びます。ドローレスの正体見破ったりという方はメッセージでお願いします。

Chapter 5 secret bush of mimosa

眠り草ミミザの茂み、秘密の花園。

一度目の逢瀬の星空を。窓の奇怪な幾何学アラベスク模様を。

貴方は覚えているかしら？

O S A
Chapter 5 secret bush of mimosa

ドローレスは白兔の家を出て、一本道に沿って歩き森に入った。道は分かりにくくなり、だんだんと迷子に近づいている気がする。

「これは何ていうか……本当にまずいわ」

今までは白兔やドードー鳥が居てくれたおかげでどうにか乗り切ってきたが、森の中で独りぼっちは流石に嫌すぎる。折角家を出て来たのだから、好きなだけ楽しんで遊びたいところなのだ。

誰か出てこないかしら、と考え、少し迷って付け足す。できれば頼りになりそうな人が良いわ。

そのまま歩き続けていると、曖昧だった道は更に消え、足の先にはキノコが生える様になった。しかし丸っこくどこかファンシーで、掌サイズもあればドローレスの背丈を優に超えるものもあった。と言っても、今のドローレスは7センチ程しかないのだが。

「ねえ、お話しない？」

と、見上げたキノコの上から、声が降って来た。ドローレスは慌ててキノコから距離を取り、上が見えないか試してみた。先ほどまで気付かなかった。もしかしたら今現れたのかもしれないが、少女がそこにいた。

少女、といっても、ドローレスよりも少し年上に見える。栗色の髪、小麦色に焼けた肌は、キノコの上よりも、夏の海辺の方が似合

いそつだ。おまけにサングラスを頭に載せている。

「貴女は、誰？」

「芋虫よ、アリスちゃん」

「……………」

芋虫。なかなか似合わなかった。どちらかといえば　そう、蝶と言われれば納得出来るかもしれない。どこか妖艶さを含めた儂げな笑顔は、ひらひらと舞う蝶のよう。

彼女は手に持った長いストローで、キノコの後ろを指した。見ると、背の低いキノコが階段のように続いている。上ってこい、ということだろうか。

ドローレスは足を滑らさないようにそつと、キノコの階段を上り、大きなキノコの上に出た。長いストローを加えた芋虫が横になっっている。ストローの端は、良く分からないガラスの瓶に繋がっていた。芋虫や今のドローレスの大きさと比べるとかなり大きい。もちろん、実際には5センチ程なのだろうが。

「それ、何？　ジュースではないみたいだけど」

「水煙草。確かに、ジュースではないわ」

とすると、啜キセルえているのはストローと言うより煙管キセルといったところか。

しばらくそのまま待つてみたが、芋虫は何も言わない。お話しな、いと話しかけて来たくせに、とドローレスは頬を膨らませた。手持無沙汰に芋虫の隣に座り、まじまじと半透明の瓶を見つめる。

「水煙草に、興味があるの？」

不意に、芋虫は首を傾げてドローレスを見た。いきなり話しかけられてどきりとするが、それを隠して平然と答える。

「ええ。だって、煙草は見た事が在るけど、水煙草なんて初めて見たわ。おいしいの？」

「まあまあ、かしら」

「じゃ、どうして吸っているの？」

「私が、芋虫だから」

意味が分からない。

再び芋虫は煙管キセルを咥え、胸一杯に煙を吸いこんでいる。数瞬間の後にふうう、と煙が吐き出され、ドローレスはその匂いに目を丸くした。予想したような灰臭さはなく、ふわりとした柔らかな匂いだ。

「あら、煙草つて言う割にはいい匂いね。花みたいな香りだわ」

「水煙草だもの、冷たくて気持ちいわよ」

「ちなみにこれは眠り草風味ミモザラレーパー、と付け足す。眠り草ミモザがどんなものは知らないが、眠たくなってしまふのだろうか。吸っている彼女もどこか眠たそうだし。」

ふうう、とまた煙が吐き出され、ふわりと花の香りがドローレスを包んだ。濃厚な花の香りにくらくらするが、そういえば、と聞く事を思い出す。

「ねえ、芋虫さん。私、もう少し大きくなりたいのよ。何か知らないかしら」

「大きく？ そうね、そうねえ……」

再び沈黙。ドローレスは彼女が煙を吐き終わるのを、じっと待つはめになった。芋虫とテンポ良く会話するのは、どうやら無理なようだ。

「……大きく、なりたいのかしら」

「ええ、まあね。流石にこの大きさだと……ちょっと、歩くにも大変だし」

実際、ここに辿り着くまでかなりの時間と体力を必要とした。白兎の家からそこまで遠く離れているとは思えないが、掌サイズでは困難な道のりだった。

「ふうん、そうなの……？」

「ええ、貴女ははずれ、空を飛べるようになるから、関係ないかもしれないけど。私は蝶にはなれないし」

「……分からないわ」

芋虫の言葉に、ドローレスは首を傾げて彼女を見た。彼女が芋虫

だと言つのなら、てつきりいつかは蛹になって、そして蝶になるのだと思つていたが。

彼女はドローレスが見えていないかのように、ぶつぶつと言葉を続けた。

「分からないわ。私は芋虫、あくまでも芋虫なのよ。芋虫が蝶になったら、一体どうなつてしまふのかしら……。私は、私そのまま居られるかしら……。？ 時の流れは、たやすく人を風化させるわ。私に与えられたのは、芋虫という名前と、キノコと、水煙草だけ。あとはなーんにも、分からない」

また花の香りが吐き出され、ドローレスはぽかんとした。まさしく、文字通り煙に巻かれたようだ。芋虫は気にするようでもなく、煙管キセルでキノコを指した。首を傾げるドローレスに短く言う。

「片側で大きく、反対で小さく」

それだけ言つと眠たげな顔でキノコから降りて行つた。慌ててドローレスも後を追おうとするが、彼女は黒っぽい箱のようなものに入ってしまった。まさかあれが蛹か、と思いまじまじと見る。が、それは蛹というよりも、控えめに言つてどちらかといえば 棺桶のようだった。

ドローレスは唇をきゅつと噛みしめ、先ほどの言葉を思い出した。片側で大きく、反対で小さく。先ほどまで乗っていたキノコを見上げ、両手を伸ばして端を千切ってみる。両手の白っぽい欠片を見て、生唾を飲んだ。

食べれば、いいのだろうか。

生の、キノコを。

「……これは大きくなるためのよ。そう、我慢するのよ、私……。ぶつぶつと唱えて、勇気を振り絞つて左手の欠片を齧つた。思つたよくな苦味も渋みもなく、むしろ果物のような甘さに眼を丸くする。そつと周りの物を窺つと、しゅるしゅると小さくなっていく。どうやら正解だったようだ。

20センチ程の大きさで、変化は終わった。これなら踏みつぶさ

れる心配はないだろうと、ドローレスは歩き始めた。しばらく歩いていると、木々がまばらになり小道が見えた。どうやら森を抜けたようだ。

小道の先には、白兔のものとは違う家が見える。白兔のものが小さくて可愛らしい感じだったのに対し、こちらは綺麗な感じだ。

今度はどんな、びっくりだろうか。

サブタイトルは「秘密のミモザの茂み」。

はい、これで最大のヒントは眼の前に晒し終わりました。という事で冒頭詩も『アリス』とは関係の無い物が混ざっていきます。ネタバレしてやつですな、通じる方が居たら凄いです。いや、ほん

と。
ドローレスの正体があった方も「知るかバカヤロー」な方も、一言下さると糸冬は物凄い勢いで感謝感激雨霞です。むしろ嵐の勢いでお応えします。

Chapter 6 cLamor of pepper's haze

癩癢をおこした夫人は荒れる。シャーロット

目前へと晒された、鍵のかかった秘密の所為で。メモリアル

それは一体、誰のもの？

Chapter 6 cLamor of pepper's haze

近くまで行くと、どうやら平和的な展開は望めそうにないという結論に達した。眼の前のドアの奥からは、騒々しい喧噪の音に溢れている。食器の砕け散る音、耳に突き刺さる様な金切り声、赤ん坊のものであろう泣き声。

ドローレスはしばらくドアの前で立ち尽くし、呆然としていた。メルヒエン非日常的な冒険が、一気に妙な血生臭さの混じる現実的な何かになったのだ。どうしようか、と逡巡もする。見なかったことにして立ち去りたい気持ちでいっぱいだが、行くところなんて何処にもないのだ。

近づくと、表札が見えた。「公爵夫人の家」とだけ書いてある。夫人がいるのなら公爵も住んでいそうだが、この騒音だともしかしたら別居中かもしれない。

離婚間近の家に乗り込んでいく勇氣は流石にない。しかし好奇心はあるし、何より他に行くところもない。ドローレスはしばらく迷った後、そっと、少しだけ見るだけ、とドアを細く開けて中を窺い見た。

最初に感じたのは、鼻をつく異臭だった。臭い、とかではなく、ただただ鼻に突き刺さる粉っぽい匂い。丸くした目に涙が滲み、原因が思い当たった。この匂いは、胡椒だ。それも大量の。

涙の滲む目で捉えたのは、背の高い女性の後ろ姿だった。見慣れ

ない、まるで1世紀以上前の人が来ているかのような、装飾の多いドレス。腕に抱いた赤ん坊を、乱暴な手つきであやしている。否、あやしていると言うよりも、揺さぶっているという感じだ。ドローレスの位置からは見えづらいが、ちらりと横顔が窺えた。

その横顔は。

怒りに歪んでいたとしても、見間違えようもなく。

「おかさ……」

ドローレスの声は途中で止まった。止まらざる得なかった。

三十代半ば程に見え、ちらちらと見える横顔は憤怒に歪んでいる。綺麗に結い上げられていたであろう髪が、ほつれて一筋二筋と零れてきていた。頭に被っていた布の塊は崩れ落ち、髪が全て背に零れおちる。

ドローレスは何も言わず、ただ癩癩を起して喚き続ける公爵夫人を見つめた。醜悪なほどに赤い口紅を塗りたくった唇がわななき、ブロンドがかった茶色の髪はうねってはざりと音を立てる。

と、机の下にぎらぎら光る物を見つけた。金色の輝きが二つ並んでおり、横にした銀色の三日月がキラキラしている。

机か何かの装飾か、とドローレスが見つめていると、じわじわとその周りに毛皮が出て来た。目を丸くしてその奇妙な変化を見ると、それは縞模様をつくり、顔の輪郭が描かれ、三角の尖った耳も現れて 数秒もしないうちに、そこには暗い色調の縞模様の猫がいた。耳まで届きそうな程に口が裂けており、にやにやと笑っている。ここまで明確に笑っている動物は、初めてだった。

猫はドローレスに気付いたのか それとも最初から知っていたのか 胡椒の煙の下をくぐり抜けて扉まで歩いて来た。小さくしゃみをして、そつと音も立てずに外に出てくる。

扉の前に居たドローレスはとりあえず道を開け、猫を外に通した。そして扉を閉めて、猫に向き合う。猫は相変わらずにやにやしたまま、金色の目でドローレスを見つめていた。白兔のように笑っているようで全く笑っていないのも不気味だが、顔どころか存在全てを

使って笑っているというのも不気味だ。

笑っていると言うよりも

むしろ、笑われていると言うか。

猫はドローレスの視線を気にする風でもなく、のらりくらりと歩き出した。そしてドローレスの見ている前でぴよっと木に駆け上がった。その身のこなしは流石は猫といふべきか、危なっかしさなど何処にもない。

にゃあ、と猫が鳴いた。ふらりふらりと尻尾を揺らして、ドローレスを見下ろす。小首を傾げて、にたり、と笑った。白兔のように歪でもなく、ドードー鳥のように優しくもなく、芋虫のように儂げでもない。ただただ嘲笑し、冷笑し、ほくそ笑み、にたにたと、まにまと、にやにやと。

「はじめまして、お嬢ちゃん」

喋った。見た目の凶悪さに反して、意外と可愛らしい声だ。自分と大して年の変わらなそうなボーイソプラノで「お嬢ちゃん」と言われるのも妙な気分だが。とりあえず、ええと、と口ごもって答える。

「はじめまして。私はドローレス……貴方は、誰？」

「おれは、チエシャー猫だ」

「チエシャー猫？ ただの猫じゃないの？」

首を傾げながら、本当に不思議そうにドローレスが言う。何やら良く分からない言葉がくつついていくが、そのわりにただの猫と変わらない見た目をしているのだ。服を着てもいなければ、二足歩行をすることもない。

と、チエシャー猫は笑みを引っ込めて目を真ん丸くした。いきなり笑みを引っ込めたので、ドローレスは今更ながら失礼だったかと冷や汗をたらした。チエシャー猫の牙は、少し見えるだけでもかなり尖ってぎらぎらとしていたからだ。

そして数瞬の沈黙の後、弾けるような笑い声が辺りに響き渡った。甲高いその笑い声はチエシャー猫のもので、ドローレスがぼかんと

口を開ける程に笑い転げている。細い木の上で爪を立てて、ひいひい言う程に笑っている。

「な……何がそんなに面白いって言うのよ？」

「だってお嬢ちゃん！ おれをただの猫だなんて！ そんな風に言うなんて！ ひやははははははつ、こりゃあ良い、すこぶる良いぞ、お嬢ちゃん！ なあなあなあなあ、お嬢ちゃん！ あんたのいたとこじゃあ、猫が喋るのが当たり前だったのかい！？」

「え……」

猫が喋るわけがない。それが当たり前だ。

しかし先ほどドロレスは「猫が喋るのが当たり前」だと、そう本気で思っていた。白兔、ドードー鳥、芋虫。彼等が喋っていて、いつの間にかそれを当り前だとそう、慣れ始めて。

「馴染んだな、お嬢ちゃん」

びく、とドロレスの身体が震えた。チエシャー猫は軽い声で、軽い口調で、深い深い笑みを浮かべる。金色の目を細めて、顔が裂けそうな程に大きな口をにやにやさせて。

どうしてだろう、先ほどまで子供のように笑い転げていたチエシャー猫が怖い。恐ろしい。敵意も殺意も向けられていないのに、ただ恐い。まるで、絶対にしてはいけない事をしてしまって、それを見破られたかのような。

「この、イカれた世界に馴染んじまったな、お嬢ちゃん？ あーあ、そんなんで大丈夫かねえ？ 帰れなくなっちまうぜえ？ このイカした世界から、逃げらんなくなっちまうぜえ？」

それでも良いのかいあんた、とチエシャー猫が笑う、嗤う、晒う。嘲笑い、せせら笑い、良いのかい？ と囁く。悪魔の囁きのように、静かに、厳かに、軽々しくも重々しく。

そしてドロレスはぎゅっと小さな唇を噛みしめた。静かに顔を上げてチエシャー猫を見上げ、言葉を紡ぐ。

「別に」

その表情は澄んで凜と無表情で。その瞳は気だるさを孕んで爛々

と。

「帰れなくなつたつて、良いわ」

その言葉は、緩やかな口調と裏腹に力強く、挑戦状のように叩きつけられた。

サブタイトルは「胡椒のもやの喧騒」。少しだけ変えさせていた
だきました。

公爵夫人の描写に力を入れたけど、前の描写がはるか過去過ぎて
覚えてもらえてそうにないなあ。

Chapter 7 questioned by cat

森の果ての分かれ道。チエシャーキャットにやにや笑いの猫が問いかける。

イカレた方が、イカレた方が。それとも家に帰りたいか。

君が行きたいのはどれなんだい？

Chapter 7 questioned by cat

口づるさい母親のいるあの家から逃げ出したくて、白兔についできた。たとえここが不思議の国だろうと、イカレた世界だろうと、家に帰るよりかずつとました。

ドローレスの表情に、言葉に、チエシャー猫はにやにや笑いを消した。無表情になると本当に普通の猫と変わらなく見える。それを彼に言ったら、また大爆笑されそうなので言わないが。

「ふうん……なるほどねえ、お嬢ちゃんも随分と変わってるらしい」「貴方に言われたくはないわ」

にやにや笑う喋る猫が変わっているとされた。しかしドローレスのつつけんどんな言い返しにも、チエシャー猫はにやにや笑いを浮かべる。この猫は無表情になるか、笑うかしかないのだろうか。

「ここに来る『アリス』ってえのは、大体が何にも考えてないもんだがね。だからこそこんなイカレた世界を楽しめるんだが」

「こんな所で楽しめるの？ まあ、美味しいお菓子はあるけれど、私の趣味には合わないわ」

大きさが違って変わるし、と付け加えるドローレスに、チエシャー猫が再び笑う。

「大きさが変わってもアイデンティティが崩壊しないお嬢ちゃんも、けっこうな不思議だぜ？ 大概、驚いて泣きわめくんだがね」

「そのくらいで泣くような子供じゃないわよ。私、もう12歳よ？」

ドローレスの言葉に、チエシャー猫は首を傾げたが、そう言えば

そうだったけ、とにやにや笑いを広げた。

「あんたは二年も遅刻したんだっけね。ねえ、……ドローレス」

「……」

ドローレス。ここに来てからずっとアリスと呼ばれていた為、懐かしい気持ちに襲われた。そう呼ばれるのは酷く久しぶりだ、元々ドローレスとそのまま呼ばれることは少ない。母はローラと呼ぶし、学校の友達もドリーと呼ぶ。ドローレスと呼ぶのは、学校の先生くらいだろう。

「貴方は私を、アリスって呼ばないのね」

「お嬢ちゃんはアリスじゃない。アリスはアリス・リデル。お嬢ちゃんはドローレス、違うかい」

「ええ、そうね。そう。私はドローレス、よ」

今までずっとアリスと呼ばれていた。名乗っても名乗らなくても、口々に皆が「アリス」と呼ぶ。だからいつの間にか、それも当然だと慣れてしまった。チェシャー猫風に言うなら、「馴染んでしまった」だろう。

アリス、アリス・リデル。それがフルネームなのだろうか。一体、誰なのだろう。

私が間違えられている本当の、本物のアリスとは、誰なのだろう。「ねえ、チェシャー猫。貴方たちの言うアリスって、一体誰なの？ どうして皆、私の事をアリスって呼ぶの？ アリスだって、知っているの？」

そうだなあ、とチェシャー猫は変わらぬ態度でドローレスを見下ろす。縞模様の身体をしなやかに動かして枝から枝へと飛び移り、だんだんと降りて来た。尻尾をゆらりと揺らして、笑いながら言う。「教えても、良いけどね。そうだなあ、取引するのはどうだい？

お嬢ちゃんはおれに聞きたい事を聞く、その代わりおれはお嬢ちゃんにある事を教えてもらう」

「ある、こと？ なにそれ？」

音を立てずに最後の枝から飛び降りて、ドローレスの傍にチェシ

ヤー猫が擦り寄る。見上げていた為忘れがちだが、今のドローレスは20センチ程、猫と向き合えば目線が同じになるくらいだ。

「ねえ、お嬢ちゃん。お嬢ちゃんの最後の名前を教えてくださいませんか？」

「最後の、名前？」

名前と言つと、ドローレスだが。最後の名前というつと、ファミリ―ネームの事だろうか。しかしファミリ―ネームなど、聞いてどうしようと言つのだろうか。首を傾げるドローレスに、チェシャー猫は顔を寄せた。ドローレスの掌程もある大きな金の眼が、ぎよろりと二つ見つめてくる。

「ロー、ローラ、ドリー、ドローレス。でもお嬢ちゃんにはもう一個名前が在るだろう？」

もう一つの名前。一番最後の名前。彼が呼ぶ、名前。

どつどつ、と心臓の音が煩わしい。耳の奥から、頭の中から揺さぶられるように鼓動が高鳴る。握りしめた掌が、じんわりと湿り気を帯びていく。身体の奥底から掻き乱されているかのような不快感が全身を襲った。貧血を起こしたよりもずっと熱く、寒く、キモチワルイ。

「……いいえ、ないわ。ないわよそんなもの」

「いいや、ある。なあ教えてくれないかい？ お嬢ちゃん、あなたの最後の名前、本当の名前は、何だい？」

顔を俯いても、覗き込むようにチェシャー猫は体勢を変えた。下から見上げる様に、ドローレスの視界いっぱいにはやにや笑いの顔が広がる。ひつ、と情けなく息を呑んで、ドローレスは跳びのいた、ドローレスの反応に、チェシャー猫はにやにや笑いを深くして、口の中で「ひひひ」と笑った。そこまでするならいつそ爆笑すれば良いのに、ワザと押し殺したようにひひひ、と笑う。その様は、心底気味が悪かった。

じり、と思わず一歩下がる。ドローレスが本気で走って逃げたところで、チェシャー猫から逃げ切れとは思わないが。なにせ相手

は猫なのだ、元の大きさであつたとしても速さで叶うわけがない。

「……アリスについてはもう良いわよ。それより、道を教えてくれない？ 私、どこかに辿りつきたいのよ」

「お嬢ちゃんは何処に行きたいかにもよるがね。あっちに行けば帽子屋がある。あっちにいけば三月兔の家があるぜ。ま、あいつらの事だから、どうせ三月兔の家でイカレたお茶会でもしてんじやないかね。」

前足で器用に左右を示してチェシャー猫が答える。てつきり意地悪をして答えてくれないかとも思ったが、意外とすぐに答えてくれた。

右が帽子屋で、左が三月兔。帽子屋は想像が付くが、三月兔とは何だろう。兎は何月だろうと兎だが、三月兔は三月にしかないのだろうか。しかし今は、確か初夏だったはずだ。

とりあえず、気になる三月兔とやらの所に行ってみよう。チェシャー猫の言い方では、両方がお茶会とやら三月兔の家に居るのかもしれないようだし。

くるりとチェシャー猫に背を向け、最後に、と一応お礼を口に出す。

「……教えてくれてありがとう。私、もう行くわ」

「そうかい、それじゃまたね、お嬢ちゃん」

また、と言う言葉に反論しようとドロレスが振り返ると、そこには誰もいなかった。きよろきよろと見回してみると、近くの枝がガサリと揺れた。深緑の梢の中で金色の輝きが二つ並んでおり、横にした銀色の三日月がキラキラしている。チェシャー猫がまたにやにや笑いだけているのだ。

「……二度と、会いたくないわよ」

捨て台詞のようにそれだけ言い残し、ドロレスは三月兔の家へと歩き始めた。

Chapter 7 questioned by cat (後書き)

サブタイトルは「猫からの問いかけ」。紫とピンクじゃないチエ
シャー猫です。話の核心に迫りつつも、肝心な事は云わない気がする。

Chapter 8 Lunacy party

アキレた鼠とイカレた男とウカレた兎。

紅茶にケーキにバターパン。

マッド・パーティー
終わらないお茶会が終わるのはいつ？

Chapter 8 Lunacy party

少し歩くと木々がまばらになり、白兎の家の周りのように草原が広がっていた。道の先、そう遠くない所に小さな林があり、その手前にちよこんと家が建っている。

と言つても公爵夫人の家よりも大きい。ドローレスはポケットからキノコの欠片を取り出して慎重に齧った。60センチ程の大きさになったところで、安堵して家に近づく。案の定、「三月兎の家」と公爵夫人の家と同じように書いてあった。

チャイムを探してみたが見当たらないので、軽くノックをして待つてみた。が、一向に誰も現れない。これだったら帽子屋の方に行つた方が良かったかしら、と少し逡巡し、ドローレスは玄関に座り込んだ。もうちよつと待つてみて誰も出てこなかったら、引き返して帽子屋の家に行こう。

と、ドローレスの視界の端を小さな影がよぎった。眼を向けると茶色の塊が後ろ足で立ち上がつて不思議そうにこつちを見ている。

茶色の兎だった。野兎のように見える。ドローレスは動物に詳しいわけでもないし、ここは不思議の国なので、そういうことはあまり関係ないだろうが。

近づくと、人懐っこく寄つて来た。座り込んでそつと手を伸ばして撫でると、嫌がる様子も無い。脇の下に手を入れてひよい、と抱き上げて膝の上に載せてみる。大人しく、なかなか可愛らしい。ド

ローレスも頬を緩めて兎を撫でた。

そしてドローレスは失念していた。ここは何でもありの、不思議の国なのだと。

「やあこれはどうもお嬢さん熱烈な抱擁をありがとう！ やっぱり可愛い子に抱きしめられれば三月兎冥利に尽きるといふものだね！」
「ひ……っ！？」

膝の上に男が現れた。正確には、兎が男になったのだ。思わずドローレスが仰け反り、男に勢いのまま押し倒されて芝生に寝転んだ。「今は四月だっけ五月だっけ六月だっけ？ とにかく三月じゃあないな！ でもオレは何月だろうと三月兎、よろしくアリスちゃん！」
「……！？ ……………っ！？」

ドローレスに覆いかぶさる男は、白兎のような芝居がかった優美さも、チエシャー猫のような怒る気にもなれない小憎たらしさも無かった。ただただ五月蠅く、賑やかで、破天荒な イカレた男だった。

兎のときと同じ茶色の髪 だが、白兎のように束ねてはおらず、寝癖で好き勝手な方向に向かっていた。服装も、正装とは言えないラフな格好で、更に着崩してある。

男の身体の下でじたばたともがいてみるが、男は意に介さずにドローレスにじゃれついてきた。最早悲鳴も出ずに、ドローレスが顔を青くする。不思議の国に来ていろいろな事があったが、これはあまりに酷い仕打ちだ。

「……いい加減、放してやれよ、三月兎。その子、嫌がつてるだろ」
不意に、呆れた口調でそんな台詞を言いながら、少年が現れた。
こちらの少年はドローレスよりも少し年上位に見える。正装らしき服装だが、やはりどこか着崩してあった。羽や花やりボンなどがこれでもかと付いた、酷く装飾過多な帽子かぶっているのが特徴的だった。

三月兎は少年を見て、お、と声を上げた。ぎゅう、とドローレスを押しつぶさんばかりに抱きついたままで、にかつと笑いかける。

「なーんだよ帽子屋、仲間に入れてほしいのか？ 照れてないで来いよ。お前もアリスちゃんに抱きしめてもらうか？」

「人の話を本当に聞かない奴だな……。とにかく、その子の上から退いてやれ。怖がつてるだろ」

「え、そうなのか？」

「当たり前でしょ！」

ドローレスは三月兎の言葉に、怒りで身体を突き飛ばした。ごろんと草の上に三月兎が転がるが、本人はとぼけた顔で「なーんだそうだったのか」と呟いている。反省の色など微塵もない。

立ち上がろうとするドローレスに、す、と手が差し伸べられた。

その帽子屋の手を取り、立ち上がる。ようやく向き合って、帽子屋は口を開いた。

「改めまして、僕は帽子屋。不思議の国へようこそ、アリス。歓迎するよ」

軽く微笑んで会釈する様に、どきりとする。少し年上の少年に手を取られこんな事を言われたら、当然の反応だ。帽子から零れる茶色の髪も、なんだか懐かしい。碧の眼差しも、見覚えがある気がする。もしかしたら、どこかで会っているのかもしれない。公爵夫人の前例もある事だし。

「いよーし、アリスちゃんもお茶会に参加しなよ。楽しませてやるぜ？」

「お前が言うつと卑猥だから口を閉じる馬鹿兎」

「何だと俺が居なかつたら寂しい癖にー」

「間違いなく平和になるな」

そう言い合いながらも、二人のコンビネーションはぴたりと揃って、ドローレスを両側から引っ張っていた。半ば引きずられるようにして、両手を掴まれたまま家の裏手に向かう。

裏庭にはテーブルとイスが出ていた。テーブルの上にはお菓子やティーカップが並べられて、甘い匂いが漂っている。

テーブルには先客がいた。小柄な少女であり、その顔は可愛らし

い。が、何故か寝間着ネグリジエを着て小さなリボンのついたナイトキャップを被っている。ある意味その格好に相応しく、突っ伏して寝息を立てていた。誰かに掛けられたのか、ガウンもおっている。

三月兔が隣の席に座って、彼女の頬を突っついた。んん、とうめき声上がるが、閉じた瞼は変わらない。

「おい、眠り鼠ヤマネ。いい加減起きろよ、アリスちゃんに来てるんだぜ？」

「あり、す……？ うーん……」

ようやくもごもごと呟きながら身体が起きるが、まだ顔は眠たげで舟を漕いでいる。上半身がふらふらとして安定しない。

帽子屋に促されてドローレスが上座に座り、両側に帽子屋と眠り鼠ネが座っている格好となった。お茶会らしく、テーブルの上にはお菓子と紅茶のポットが何セットも並び、四人しかいないのがもったいなく思える程だ。

しかし、これがその実、全くお茶会らしくないと言う事がすぐにドローレスにも分かった。

三月兔はバターパンに手を伸ばして、カップに並々と紅茶を注いで飲み干している。風味を味わうなんてどこ吹く風だ。眠り鼠ヤマネは相変わらず眠たそうで、顔がだんだんと下りていつては紅茶に鼻先が沈みかけて顔を上げている。が、髪の毛には紅茶の雫が垂れており、ナイトキャップには三月兔の零したバターが付いていた。

まともにお茶会らしく紅茶を飲んでいるのは帽子屋とドローレスくらいだ。しかし帽子屋もこの状態がまるで当たり前の常識的日常であるかのようにカップを傾けているので、ある意味では非常識だ。なるほど、チェシャー猫の言っていた「イカれたお茶会」の意味が良く分かった。確かに、紛う事なくイカれている。

ドローレスは口の端に笑みを浮かべ、紅茶に手を伸ばした。折角、呼ばれたのだから、楽しまなければ。

Chapter 8 Lunacy party (後書き)

サブタイトルは「狂ったお茶会」。

眠り鼠はフランス語で「眠る女の人」という意味もあるので、女の子になりました。少年にしようかとも思ったのですが、文字通りの意味を優先しました。

次回もお茶会が続きます。

公爵の海辺、忘れ物の傍観者。^{サンゲラス}

二度目の逢瀬の砂浜を。熱い紫紺の岩影を。^{ラスペルー}

君は覚えているだろうか？

Chapter 9 secret of princedom
by the sea

久しぶりに食べたまともなお菓子にドローレスの頬が緩み、イカしたお茶会の妙な騒がしさと静けさにも慣れた頃、帽子屋が懐中時計を取り出した。こつこつ、と指でつついて、ため息をつく。

「アリス、今は一体何日だい？」

「え？ えつと、確か四日、だったと思うわ」

「参ったな……二日もずれてる。道理で帽子の催促状が来るはずだ」
かしゅん、と時計をテーブルに投げ出してため息をつく。ドローレスは帽子屋の言葉に首を傾げて、聞いてみた。

「その時計は時間じゃなくて、日付が分かるの？」

「本当はね。でもここでは時間が狂ってる。時間が動かない代わりに日付が動いているんだ」

「ここんとこ何日も、ずーっと六時のまんま。だからお茶会が終わらないんだ」

帽子屋の言葉に続けて、三月兎も口を開いた。ドローレスは二人の言葉に混乱し、考えながら言う。

「時間が動かないで、どうして日付が動くの？ だって、日付って時間が進むから変わるんでしょう？」

「だってここは、不思議の国だから」

何を当然の事を、と言わんばかりの表情で帽子屋が言う。不思議の国だから、イカれた世界だから。狂っているのは常識だけかと思

つたら、時間の概念そのものまで狂っているとは。

三月兎はテーブルを滑って来た時計を掴んでバターパンに挟み、紅茶のカップに突っ込んだ。何をしているのかと驚くドロレスに構わず、三月兎は至極真面目そうに紅茶とバターとパンくず塗れになった時計を睨みつける。

「直りやしねえな」

「そんなので直ると思ってるの？」

「思ってるつつうか、可能性だ。前は最高のバターを詰めてみたけど、駄目だった」

あつさりと言う三月兎に、ドロレスは呆れてため息をついた。本当に、イカれている。帽子屋も「そうか」と普通の反応だ。まともなようで、彼もやっぱり不思議の国の住人なのだ。

三月兎は唇を尖らせて時計を放り投げ、今度は隣の突っ伏している眠り鼠ヤムネを突き始めた。帽子屋も止めるそぶりを見せず、むしろ手が届けば参加しそうな雰囲気だ。

「おい、退屈だぞ。眠り鼠ヤムネ、お前なんか話でもしろよ」

「んえー、……話したら、寝させてくれる？」

「面白かったらな」

三月兎の言葉に、眠り鼠ヤムネはようやく身を起こして、大きな欠伸を一つした。そして、やはり少し眠そうな顔のまま口を開く。

「昔々のお話です……海のほとりの王国に、一人の娘が住んでいました。その子の名前は……アナベル・リー……」

緩やかな抑揚が少し調子を付けて、まるで詠うように眠り鼠ヤムネは続けた。眼を閉じると、眠り鼠ヤムネの声は深く心に沁みこんできた。

「いつも心に思うのは、僕への愛と僕の愛……僕もあの子もふたりの子供……海のほとりの王国で、愛し愛して愛以上……僕と僕のアナベル・リー。翼あるあの、天使さえ……僕らの愛を、うらやんだ……」

と、ふつりと声が途切れた。ドロレスが目を開けると、案の定、眠り鼠ヤムネはまたテーブルに突っ伏している。三月兎はその隣で大きく

欠伸をして、ナイトキャップから零れた眠り鼠ヤムネの髪を引つ張った。

「全く、こいつの話はいつも最後まで聞けたためしがねえ。こいつが寝ちまうか聞いている俺が寝ちまうか、だ」

「確かに……ちよつと眠かったわ」

眠そうな声で詠うように喋るものだから、まるで子守唄のようだった。あともう少し長く話が続いていたら、寝ていたかもしれない。隣の帽子屋はというと、平然とした顔で紅茶を飲んでいた。否、少し目がぼおつとしている。彼もまた眠くなったのだろうか。しかしその様子は、まるで

「芋虫さんみたい」

「え？」

ぼつりと呟いたドローレスの言葉に、帽子屋が途端に反応した。そして少し遠慮がちに、そろそろと聞く。

「君、芋虫に会ったのか？」

「ええ、会ったわよ。それがどうかしたの？」

「彼女は……元気だったか」

何故そんな事を聞くのかと思いながらも、芋虫の様子を思い出して答える。

「眠たそうだったけど、ね。元気そうだったわ」

「そ、そうか……なら、良いんだ」

帽子屋はそれを聞くと、ほつと分かりやすく安堵の息を吐いた。それを見て、にやにやと何処かの猫のように三月兔が笑う。

「わっけ分かんねえよなあ。こいつ芋虫に熱上げちゃってんだぜ？」

「あーんな小さな虫によ？」

「う、うるさいっ！ 彼女を侮辱するな！」

途端に帽子屋の顔がかあ、と真っ赤に染まった。ぽかんとするドローレスにも構わず、三月兔に喚き続けている。その顔は真剣で、耳まで赤くなっていた。

つまり、そういう事、なのだろうか。

ドローレスはすこし考えてくすりと笑みを浮かべ、ポケットから

取り出したキノコの欠片の大きな方を千切った。その欠片を、落ちて着いてきた帽子屋に差し出す。

「ねえ、貴方にこれ、あげるわ」

「な、なんだ？ これ……」

「キノコの欠片よ。食べると、芋虫さんくらいに小さくなるの」

にや、と笑うドローレスに、帽子屋が目を丸くした。そして、恥ずかしそうに、しかし少し嬉しそうにはにかみながら呟くように言う。

「……君、良い奴だな。ありがとう」

「どういたしまして、よ」

笑顔で言葉を返して、不意にドローレスは林の中の大きな木に気が付いた。太いその幹には、まるでそこにあるのが当然と言わんばかりに扉が付いていた。ドローレスはそれをしげしげと眺め、キノコをポケットに入れて立ち上がった。テーブルに向き直って、にっこりと笑う。

「ごちそう様、なかなか楽しかったわ」

「おう、また遊びに来な」

「何時でも、ここはお茶会をしてるから」

「……また、ね……」

それぞれの言葉を聞いてから、ドローレスは扉の向こうへと入っていった。

Chapter 9 princedom by the secret s

サブタイトルは「公爵の海辺の秘密」。princedomはkingdomの親戚のような言葉。公爵の土地、という訳になります。ちなみに夫人はそう関係ありません。

Chapter 10 heart in the rosery (前書)

11/02/18 改稿

Chapter 10 heart in the rosery

真つ赤な真つ赤な独裁君主。ハートのクイーン

皆知ってる、その恐ろしさ。皆囁く、その冷酷さ。

しかし一体、彼女の名前は誰が知る？

Chapter 10 heart in the rosery

木に付いた扉を開けると、そこは最初に来た扉ばかりの廊下だった。驚きながらドローレスは背後を振り返った。今通って来た扉を開けようとしたが、やはり鍵がかかっている。不思議な事の連続で、何が起きてもおかしくない気がしてきた。

少し向こうを見れば、カーテンの陰にはちらちらと小さな扉が見えている。ドローレスはガラスのテーブルから鍵を取って扉を開け、キノコを慎重に食べながら半分程の大きさになった。そして高鳴る胸を押さえながら、そつとその扉を開いた。

暖かな色の石畳が、手入れのいき届いた木立の中を緩やかにくねりながら伸びていた。ドローレスがその石畳を気取って優雅に歩けば、色とりどりの花々と相まって舞台のようだ。噴水の澄んだ水面はぱちぱち弾けて、吹き上げられた冷たい水が頬にかかって気持ち良い。辺りを飛び回る蝶は見た事もない物も混じっていて、花畑が空を飛んでいるかのように色彩が宙にまで溢れている。

これで王子様が出てきたら、本当にお姫様みたい。ああ、騎士様でも格好良いかもしれない。

そんな風に考えてしまうあたり、ドローレスはかなり余裕だった。念願の庭に来れたのだから、もっと楽しみたい。その一心で、奥へ奥へと歩いていく。

そして不意に、滑らかなテノールの響きが聞こえた。

「久しぶり、アリス」

「白兔……」

目をやれば、曲がりくねった道の先から白兔が顔をのぞかせていた。ドローレスに歩み寄り手を伸ばす。

「女王様の庭で、何をしているの？ ああ、そうして立っていると、アリス……君はまるで妖精だね」

可愛いよ、アリス。そううつとりと呟いて微笑する。それでも、その紅い眼はドローレスをじっと見つめて笑っていない。

逃げ出したい。が、足がすくんで動けない。頬を白兔の滑らかな指が滑り、唇にかかる。息が止まるかと思ったが、一つの声により、その緊張は終わりを告げた。

「白兔、何をしているの。チェリーパイはどうなったのかしら」

「麗しき我が女王陛下。私は、アリスと話していたのでございます」

落ち着いた女性の声が聞こえ、そしてその姿が現れた。

艶やかな黒髪が、緩いウェーブを描きながら背に垂れている。栗色の眼は、不思議そうにドローレスを見つめていた。彼女の格好は全体的に赤く、所々に紅いハートがあしらってある紅いドレスを着て、同じく紅いハートのイヤリングをしていた。

ドローレスの元まで歩み寄ってくると、白兔が離れて片膝をつき頭を垂れた。女王陛下、と言っていたし、身分の差と言うやつかも知れない。ドローレスも頭を下げるなりした方がいいのかも考えたが、無作法な自分にふさわしいやり方が出来るとは思えない。そうこうしているうちにも女王はドローレスの眼の前まで歩いてきていた。にっこりと微笑み、口を開く。

「そう、貴女が『アリス』なの。お名前は？」

「えっと、ドローレスです、女王陛下……？」

「無理に畏まる必要はないわ。気楽にして頂戴」

そう言って、女王はドローレスの手を取った。怪訝な表情を浮かべるドローレスに、にっこりと少女のように笑う。

「貴女とお話したいの。少し、良いかしら」

「え、ええ」

「良かった。白兔、貴方は城に戻っていなさい」

「畏まりました、女王陛下」

白兔がこの場から離れることにほっとしつつ、ドローレスは女王に手を引かれるままに付いて行つた。周りの花が薔薇が多くなり、薔薇園に入ったのだと分かる。その中の小さな東屋まで行くと、女王は手を離れた。どうやら目的地はこのようだ。

屋根の下に入り、椅子に腰を下ろす。向かいに女王が座り、ドローレスは緊張しながらも安心していた。今の所、女王はまともな行動ばかりしている。不思議の国では珍しく、まともな人なのかもしれない。

「いきなり連れてきて、ごめんなさいね。でも、どうしても貴女と話したかったから」

「い、いえ。別に、構いません」

慣れない敬語にどもりながらもドローレスは答え、その様子に女王はくすりと小さく笑みを浮かべた。不思議の国に来て初めて、まともで穏やかで静かだ。だが、

「やあお嬢ちゃん、ここまで来ていたのかい。てつきりお茶会にいると思つていたぜ」

と言つて、突然。ドローレスの目の前に、さかさまになった生首が現れて笑つた。

「きゃあああああつー!!」

ドローレスの悲鳴が、庭中に響き渡つた。

「どうもお久しぶり、ハートの女王陛下。先ほどぶりだね、ドローレスお嬢ちゃん」

「久しぶり、チェシャー猫。今ちょうど、新しい『アリス』とお話していたの。アナタも一緒にどうかしら」

「甘ったるい紅茶がないならね。胡椒も嫌いだが、甘い物も嫌いなんだ」

「あら、残念」

どこか空とぼけた様な会話に置いて行かれつつ、ドローレスはただばくばくと跳ねまわる心臓を宥めた。察するに二人は顔見知りらしいが、どういうことだろう。先ほどから会話に置いてかれていて、訳が分からない。新しい『アリス』、と言っていたが、何のことだろう。

陶器の音が鳴り、ドローレスは顔を上げて二人を見た。チェシヤ―猫はそのまま椅子に座らず、女王の脇に立ってドローレスを見つめていた。落ち着きを取り戻したドローレスを向いて、女王が再び口を開く。

「改めて、はじめまして、新しい『アリス』。私は『ハートの女王』、アリスよ」

「え………?」

今、彼女は何と言った。ハートの女王、そして。

女王は笑みを消し、もう一度言った。

「アナタより以前の、始まりの『アリス』……『アリス・リデル』。それが、私よ」

Chapter 10 heart in the rosery (後書き)

サブタイトルは『薔薇園のハート』。とにかく真つ赤なハートの
女王の回。白兔とチエシヤ―猫も出てきました。

衝撃の事実が発覚しつつ、次続きます。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

改稿開始。

Chapter 11 STRAY HEROINE (前書)

11/02/18 改稿

Chapter 11 Stray heroine

残酷な二人のお姫様、男に命じたのは一つの^{テイル}世界。
黄金の昼下がりにボートの中で、少女は世界から飛び出した。
少女は帰ってくるのだろうか？

Chapter 11 stray heroine

『アリス』。

何度も呼ばれて、何時の間にかそれにも慣れた。訂正してもよく分からない答えが返ってくるし、何も言わずとも皆がそう呼ぶ。

だからそれは、そう言う物なのだと。そうやって、馴染んでしまった。

「貴女が、アリス……？」

「一番初めの、ね。この不思議の国が始まった時に、最初に迷い込んで来たアリス。それが私なの」

今は、『登場人物』だけ。と付け加えて、紅茶に舌鼓を打ち女王は笑みを浮かべた。ドローレスは差し出された紅茶に角砂糖を落とし、スプーンでかき混ぜた。角が取れて、だんだんと丸くなっていく。

「その、『登場人物』って何なの？ まるで御伽噺だわ」

「お嬢ちゃん、鋭いねえ。その通りだ、おれたちは娯楽みたいなもんなんだよ」

ふざけるように、チェシャー猫はにやにやと答えた。女王も笑みを浮かべ、言葉を重ねる。

「外の、現実の世界から迷い込んでくる『アリス』を迎え入れて、楽しんでもらうのが私たち『登場人物』の意味よ。私はこの世界の支配者、『ハートの女王』という役割を与えられてはいるけれど、

元々は『アリス』としてこの世界へやって来たの。

でも、現実に帰るのが嫌になったのよ」

「嫌、に？」

ドローレスの言葉に、女王はまるで少女のように唇を尖らせた。カップを両手で包むように持ち傾け、喉を潤して続ける。

「だって、現実なんて嫌なことばかりじゃない？ 不思議な事も夢見がちな事も起こらないなんて、あまりにもつまらないわ。だから私はルイスにお願いして、『登場人物』としてこの世界に留まったの」

ルイス。また見知らぬ名前が出てきた。ドローレスの訝しげ顔に気付いたのか、女王は言葉を続けた。

「ルイスは、この世界の作り手。現実の世界で私のお友達だったわ。……でももう、それ以外の事は思い出せないのよね」

「え？」

お友達、という言葉から親しげな様子を想像していたのだが。簡単に忘れてしまう様な人だったのだろうか。内心で首を傾げるドローレスを察したのか、チェシャー猫がにやにやと口を開いた。

「言つたらう、お嬢ちゃん。馴染むなよって。この世界の一部として、『登場人物』として馴染んでしまうと、現実の世界をだんだん忘れてくんだよ。いつかは、ずっとここに居ると思いきむただの『登場人物』だ」

かちやり、とスプーンが止まる。砂糖は溶けきって、澄んだ紅茶の中に消えていた。

猫は喋らない。扉は空間を飛び越えない。そんな当たり前の事でさえ、いずれは忘れてしまう。なぜならそれは、現実の世界の記憶だから。

「……私も、『登場人物』になるの？」

「お嬢ちゃんが望むのなら。『アリス』は現実から逃げ出したい子

供にしか与えられない『登場人物』だからな。『白兔』はソイツを選んでここに連れてくる」

現実から逃げ出したい。

なるほど、確かに『白兔』は間違っていないようだ。ドローレスは『アリス』で、人違いでもなんでもない。ドローレスは逃げ出したいと思つて、望んで白兔に付いてくる事を選んだのだから。

の腕の中から。

「お嬢ちゃんが望まなきゃ、ルイスはお嬢ちゃんを留めたりしねえよ。安心したかい？ お嬢ちゃん」

気付けば、チエシャー猫に心配されていた。きよとんとすると、チエシャー猫の方も首を傾げる。

「自覚しちやいねえのかい。お嬢ちゃん、真つ青になってたぜ？」

「紅茶、冷めちゃったかしら。お代りはいる？」

「あ……いい、わ。大丈夫」

女王からも心配するような言葉をかけられ、つつ換えながらも言葉返す。なんだろう。今、何かおかしかったような。

「……そういえば、この世界に知り合いつているような物なのかしら？」

彼等の話ならば、現実のものは一切入り込めないようにも感じる。が、公爵夫人の姿を思い返すと、それも怪しい。チエシャー猫はにやや笑いのまま、訝しげな表情を作つてみせた。

「知り合いつて……ああ、知り合いとおんなじ顔が居る事もあるな。そいつらはお嬢ちゃんが連れてきた『挿絵』だ」

「挿絵？」

「この世界は今、貴女が主人公『アリス』だから。『アリス』の現実 逃げ出したいと思つた要因の断片が入り込む事が在るのよ。変わるのとは外見だけだから、私たちは『挿絵』と呼んでいるの」

文章に個人が絵を想像するようにね、と女王が付け足す。ドローレスは紅茶に口を付け、唇を尖らせた。

「なんだか、妙な話ね。現実から逃げ出したくて来たのに、原因が

付いてくるなんて」

「ルイスの考える事なんて、『登場人物』には計り知れないわよ」と、女王はにっこりと笑みを浮かべた。

「そうだわ。ねえ貴女、偽海亀の所へは行った？」

「偽、海亀？」

女王からの唐突な問いに、怪訝な顔で答える。第一、偽海亀とは何だろう。海亀に似た何かだろうか。ドローレスの表情に、女王は名案を話すように続ける。

「まだ会っていないのなら、是非会ってみなさい。面白い子たちよ。そうねえ……チエシャー猫、道案内をお願いできるかしら」

「おれがかい？」

チエシャー猫は自分に話の矛先が向くとは思っていなかったらしく、目を真ん丸くした。そして迷いの後、嫌そうな顔で頷く。

そこまで嫌なら断ろうか、とドローレスが思っていると、チエシャー猫の姿がすりと消えた。驚くドローレスの足元から、飄々とした声がかげられる。

「お嬢ちゃん、さっさと行こうじゃないか。何、海岸までそうかわるわけじゃない」

「……分かったわ。それじゃあ、女王様、ありがとう」
「いいえ」

微笑む女王にお礼を言つて、ドローレスは猫の姿になったチエシャー猫の後を追った。薔薇園を抜けて、林の中に入る。遠くから微かに潮の香りが漂ってきた。

それにしても偽海亀とは、一体どんな生き物なのだろうか。

幕間？
：

男は少女に恋をし、少女は冒険に恋をした。
夢と現は一つに。幽玄なる孤島の霧に溶ける。
夢はまだまだ。終わりはない。

幕間

目が覚めた。
見知らぬ部屋の景色に動転する。が、昨晚の事を思い出して擦れた吐息を零した。

突然だった。父から告げられた母の訃報。よく分からない病気になる入院しているとそう言われてきたのに。他にも何か言っていた気がするが、何も覚えていない。ただ泣きわめいて、眠ってしまった。

頬の乾いた涙の跡をこすりながら、この数週間のことを思い出す。サマースクールのキャンプ場に突然彼が現れ、少女を連れ出したのだ。お母さん シャーロットが病気だと聞いて、居てもたつても居られなかった。病院の場所は知らなかったが、車でずつと移動していくのは楽しかった。夜になると、病気の母を思って泣きたくなった。

そんな夜は、決まって“彼”が慰めてくれる。

キィ、と軋んだ音に、少女は顔を上げた。暗い部屋に一筋の光が入り、一瞬遮られた後ドアが閉まる。誰か入って来たのだ。眼をこすりながら、僅かな明かりを頼りに少女は呟くように言った。

「……パパ？」

「ああ、起きていたのか。起こしてしまったかな」

「ううん、違うの。さっき起きたのよ」

耳に馴染んだ優しい声に、ほっと息を吐く。流石に寂しくて寝ら

れそうになかった。これでもう、怖くないだろう。

古いベッドが軋んだ音をたてて、少女に降り注いでいた光が遮られた。ベッドに男が座ったのだ。少女の長い髪を撫でて、言葉にならない息を吐き出す。

「ねえ、パパ。聞いて？ 私、とってもおかしな夢を見たの」

口角を上げて、甲高い言葉を吐く。そうでもしないとやってられない。今はただ、目を背けたい。

「夢の中では私は12歳で、なんていうか、すっごく変な世界に行くのよ。動物が喋ったりするの。それに」

「
遮るように、柔らかく低い声が名前を呼んだ。 。 彼だけが呼ぶ名前。彼が私を抱く時に呼ぶ名前。」

「……お喋りは後でも良いだろう？ さあ」

髪を撫でていた手は、いつの間にか頬に添えられていた。少女の白い肌を慈しむように指がなぞり、その途端に眩暈がする。

シーツが滑る音、枕の籠った音、ベッドが軋む音。自分の物ではない、荒い息。

世界の全てが遠のいたかのように、少女はその身体に感じるものを遠く感じた。目の前に迫る彼の顔も、身体をまさぐる手も、広げられた足も、押し当てられた熱も。

「
、愛してる…… タ
彼が私を“抱く”ときに呼ぶ名前。」

「
、口、
。 耳に届く声は彼の熱い囁き。繰り返される名前は甘い幻惑。溺れ、落ちて行く、不思議の世界。繰

「愛してるよ、ア
」

不意に雑音が混じる。まろくひめやかな響きではない、眠りに誘うような歪な音。

このひとはだれをみているの。だれをあいしているの。だれを、

抱いているの。

そうして、少女は再び目を閉じた。

幕間？
：

(後書き)

時系列はどこか。現実か夢かわからない。アから始まる名前。
改稿に際して追加。

Chapter 12 Lone pride (前書)

11/02/21 改稿。

Chapter 12 Lone pride

誇り高く孤高であれ、空の王でありイーグル獣の王故に。ライオン

鳥が決して従わぬとも、獣が決して寄りつかぬとも。

家臣が一人とてあらずとも、それは王足るグリフォンのであるつか？

Chapter 12 Lone pride

「偽海亀に会うには、まずはグリフォンの所だな。後はあいつに任せりや連れて行ってくれるさ」

不意に耳に入ってきた甲高い声に、意識を引き戻される。どうも長く歩いているうちに、ぼんやりしてしまっただらしい。先を歩くチエシャー猫に目をやり、ドローレスは首を傾げた。

「貴方は連れて行ってくれないの？」

ドローレスの問いに、チエシャー猫はしばらく沈黙を続けた。そして珍しく困ったような表情を浮かべ、小さな声でぼそりと言う。

「ドローレスお嬢ちゃん、おれはチエシャー猫だ。イカレた世界で言うのもなんだが、常識的に考えて、猫ってのははじめじめした場所が大嫌いなんだよ」

海に好んでいるのは海猫くらいだ、とぼそぼそと呟く。しんなりと髭の垂れた様子からすると、紛れもない本心のようだ。

海の話は避けた方がよさそうだ、と思い、ドローレスは少し考えた。前を歩くチエシャー猫に、ええと、と問いかける。

「グリフォンって言うと、確か……神話とかに出てくる、怪獣の事？」

「……………それ、本人には絶対言わない方が良いぜ。怪獣扱いはされたら、プライド高いあのバカは怒り狂っちゃう。『グリフォン』はそこまで『アリス』に友好的な生き物じゃないしな」

「気を付けておくわ」

チエシャー猫の言葉に、ドローレスがため息交じりに答える。チエシャー猫は時折ちらちらと振り向きながら、ドローレスに話しかけた。

「グリフォンと、偽海亀。こいつらはこのトチ狂った世界の中でも逸品中の逸品って具合にイカレてる。まあ、一目瞭然、百聞は一見に如かず、見れば分かるがな」

「今までも相当、イカレてると思ってたけど……その二人が一番なの？」

「一番と言うか、あいつらは飛びぬけてんのさ。存在そのものがイカレてやがるからな」

存在そのもの、とは一体どういう状態なのだ、とドローレスが首を傾げていると、木々が急に疎らになり林を抜けた。小さな草原の向こうには岩場があり、その岩に座ってそれはいた。

金色の髪がばさりと揺れ、背中の翼がばさりと揺れた。獣のような黄金の瞳は胡乱気にドローレスを上から下まで眺め、ふん、と鼻を鳴らした。ぴしん、と鞭のように薄茶の毛皮の尻尾が跳ね、草いきれが舞いあがる。

「チエシャー猫に、アリスか。ふん、俺様に会うというのに手土産の一つもないのか？ それにチエシャー猫、お前は確か海が嫌いじゃないかったか」

「嫌いだけどねえ、女王陛下の頼みとあらば仕方ないさ」

低く唸るような声に、チエシャー猫の耳が垂れて尻尾が丸まる。言葉こそいつも通りに飄々としているが、その態度は怯えきつていた。ドローレスは驚いて、その原因たる男を見つめた。今まで見て来た誰よりも服装は気軽で、街中で見かけても違和感がなさそうだが、その翼と尻尾がなければ、の話だが。

「貴方が、グリフォン、なの？」

「俺様以外に一体だれが居るって言うんだ？ あんまり舐めた口聞くと喰うぞ」

ああん？ と脅すように睨みを利かせて、男 グリフォンはド口

ーレスに視線をやった。その鋭い視線にたじろぐが、唇を引き結んで堪える。

チェシャー猫はぶる、と身体を一振るいすると、その体を消した。戸惑うドローレスの肩辺りに顔だけ現れて、耳元に口を寄せる。

「グリフォンは見ての通り、偽海亀もそうなんだが、獣でも人でもない姿をしている。この世界の住人はドローレスお嬢ちゃんみたいな『人間』か、おれや兎どもみたいな二つの姿を持っている『獣』のどっちかなのさ。なのにこいつらときたら、本来の姿と人間の姿が混じってやがる」

まあ元々の姿も混じり混じった合成獣キマイラだがね、と本人には聞こえないようにこつそり囁く。ドローレスはそれを聞いて、グリフォンの不思議な姿に納得した。それで鷲の翼と獅子ライオンの尻尾が生えている訳か。

「……ところで、どうしてそんなに怯えているの？」

「グリフォンは完全なる捕食者だからな。家猫であるおれは、到底逆らえないんだよ」

チェシャー猫の自由奔放な振る舞いに忘れかけるが、彼はあくまで公爵夫人の飼い猫なのだ。流石に野性味の溢れる神話の獣に逆らおうとは思えないのだろう。

チェシャー猫は再び姿を現して地面に降りると、身を低くしてグリフォンに話しかけた。

「グリフォン、このお嬢ちゃんを偽海亀の所に連れて行ってくれよ。偉大なるグリフォン、獣の中の王、あんたなら快くやってくれるだろう？」

「当たり前だ、任せろ。俺様に出来ない事はない」

グリフォンの余裕綽々、自信満々の答えと満足げな態度に、ドローレスは呆れた目でチェシャー猫を見下ろした。逆らえないとは言っていたが、思うようには動かせるらしい。

全く、性質たちの悪い猫だ。

チエシャー猫はグリフォンの返事を聞くと、ドローレスの嫌味も聞かずに消えていった。金の眼もにやにや笑いも残っていないので、本当に何処かへと行ってしまったようだ。グリフォンが苦手なのは本当らしい。

きよろきよろと辺りを見回すドローレスに、グリフォンが顔を顰めて尻尾を鞭のように鳴らした。苛立った声で怒鳴る様に言う。

「おいアリス、さつさとついてこい。お前の脚は飾りなのか？」

その高飛車な態度にむっとするが、言い返しても無駄だろう。今までの態度からすれば、下手に逆らうよりも黙ってついて言った方が賢明だ。

グリフォンに追いつくと、彼はドローレスの方をちらりとも見ずに歩き始めた。足の長さが違うので、ドローレスはどうあっても小走りになってしまう。気を紛らわそうと、グリフォンに追いついて話しかける。

「ねえ、グリフォン。貴方と偽海亀は、友達なの？」

「友達？ 馬鹿言っつな、俺様は孤高の空の王にして獣の王だ。甘ったれた関係なぞいらん。……それに、あいつは苦手だ。塩辛いから喰う気にもなれん」

友達が居ないと言うよりなってくれないんじゃないか、とドローレスが思っているのが伝わったかのように、グリフォンの言葉が続いた。傲慢を形にしたかのようなグリフォンが苦手と言い切る偽海亀。もしかして、同じくらいに高圧的で傲慢なのだろうか。

そんな人が二人もいるところに立ち会いたくはないわ、とドローレスが思っていると、グリフォンの足が止まった。大きな赤い岩がごろごろと転がり、足元は草ではなく砂浜。潮の香りが鼻孔をくすぐり、目の前には蒼く広い海が広がっていた。深い青と緑が入り混じった、重厚な色みの海だ。

ドローレスが久しぶりに見た海に感嘆の息を漏らしていると、波

の合間に小さな音が聞こえて来た。グリフォンが音の聞こえる方に歩き始めたので、だんだんはつきりと聞こえてくる。すん、すん、と鼻をすする小さな音だ。

大きな岩を迂回して、ドローレスがその向こうを見ると、そこには一人の少年が岩の上に蹲っていた。

少年は、目の前の海のようなダークブルーからダークグリーンへのグラデーションの髪をしていた。一見、髪の色が不思議な普通の子供にも見えたが、ふらりと背後で揺れる物がそれを打ち消していた。グリフォンの物にも似ているが違う、牛の尻尾がひよろりと力なく生えて垂れていた。

すん、すん、と絶え間なく続く音に、グリフォンが苛立った調子で声を上げる。

「おい、偽海亀。アリスがお前に会いに来たぞ」

「アリスが……、僕に、僕なんか、ですか……？」

少年 偽海亀は顔を上げて、ドローレスを見上げた。びくびくと怯える様に肩が震え、視線は右往左往を繰り返して落ち着きがない。擦れた声は顔に浮かんだ表情と同じで酷く弱々しく、グリフォンが一声上げればそれだけで心臓が止まってしまいそうだ。

ドローレスは傍らのグリフォンを見上げ、偽海亀を見下ろした。傲慢で不遜なグリフォンと、卑屈で泣き虫な偽海亀。グリフォンが少し身じろぎする度に、偽海亀は大きくびくついて泣きそうな顔になっている。

なるほど、確かに相性は悪そうだ。

Chapter 12 Lone pride (後書き)

サブタイトルは『孤独な傲慢』。

七つの大罪の一つの傲慢、これを象徴する動物の一つにはグリフオンが含まれているそうです。鷲とライオンを含んでいるため王家の紋章としても使われるので、傲慢な王様気どりのキャラクターになりました。

- - - - -

改稿いたしました。

Chapter 13 real imitation (前書)

11/02/21 改稿。

Chapter 13 real imitation

偽物、紛い物、代用品。モドキでしかない存在故に。
読み書き 野心・動揺・醜怪・愚弄。
足し算 引き算 掛け算 割り算
これだけ学べば本物だろう？

Chapter 13 real imitation

グリフォンと偽海亀に挟まれて、ドローレスは居心地の悪い思いでため息をついた。女王の口添えによって来てみたは良いが、何をしろとも言われていない。グリフォンは偉そうだし、偽海亀は泣いてばかりだし、話す話題も見つからないのだ。

ドローレスのため息に、偽海亀はびくりと肩を震わせた。目を伏せておどおどと口を開く。

「な、何か、あの、してしまったでしょうか……すみません、ぼくあの」

「別に怒ってるわけじゃないわよ」

怯える偽海亀に慌てて言うが、それでもびくびくとした態度は変わらない。ドローレスは助けを求めてグリフォンを見上げてみるが、素知らぬ様だ。

ドローレスは困り切って、なんとかこの居辛い空気を脱しようと話しかけることにした。グリフォンは扱いにくいので、とりあえずは偽海亀に。

「えっと……綺麗な海ね」

「……この海岸は、海は、公爵様の物です。ここは公爵様の土地、公爵様の海辺です」

「公爵様って公爵夫人の旦那さんってことよね」

「ええ、その通りです。聡明なアリス」

このくらいの事で“聡明な”と言われても困りものだが。だいぶ

偽海亀が落ち着いてきたようなので、ドローレスは気になっていた事を聞くことにした。

「私、偽海亀つて初めて聞くんだけど………どういう、ものなの？」
どう聞けばいいのか四苦八苦しなから、ドローレスが尋ねる。偽海亀は再びすすんすと鼻をすすりながら、ゆっくりと口を開いた。

「ぼくは……海亀の代わり、紛い物です。偽物なんです。ぼくは生まれたときから死ぬまでずっと、偽物なんです。永遠に、本物にはなれないんです」

ぼろぼろと涙が零れて、白い砂に落ちていく。ドローレスは何とも言えず偽海亀を見て、グリフォンを見上げた。グリフォンは気にするようでもなく平然と言い放った。

「な、塩辛いだらう」

更に湿っぽくて陰気だ、と遠慮なく言葉を連ねる。ぼたた、と滴り落ちる偽海亀の涙が増量した。偽海亀が醸し出す陰気な空気が、より深く重く感じる。

「……………」

最初以上に居辛くなってしまった。なんとか偽海亀を元気づけようと、隣に腰かけて様子を窺う。

「偽物だなんて、言うもんじゃないわ。ええと……誰だつて誰かの代わりにはなれないつて、何かの本で読んだ事があるもの」

「はっ、お笑い草だな、アリス。誰だつて、誰かにとっての誰かの劣化コピーに過ぎない」

必死の言葉をグリフォンに鼻で笑われて、ドローレスはむっとして彼を睨みつけた。相変わらずの不遜な態度で、ドローレスを見下ろして嘲笑っている。ドローレスは必死に頭を働かせて言い返した。「そんな事ないわよ。代わりになる人なんていないわ。人は一人一人、違う物なのよ」

「じゃあアリス。お前はどなんだ？」

「え？」

「お前は間違いなくお前で、お前以外の何者でもないと言えるのか

？」

誰の代わりでもなく。自分以外の何物でもなく。

そんな事が言えるのだろうか。

今現在、ドローレスは『アリス』として、アリス・リデルの代わりをしているのだ。アリスは一人しか居ないが、『アリス』は誰かによって代わられるもの。この世界の住人にとっては、ドローレスはアリスの代わりでしかない。必要とされているのはあくまで『アリス』であり、それはドローレスではなく、ドローレスでなくても良いのだ。

そして、も。

私を、彼女として。

「……それ、でも……代わりにされたくないわよ。その人にとつて、その誰かが大切だったのかもしれないけど、私には関係ないわ。私は私よ、私でありたいのよ」

切れ切れに、絞り出すように、ようやくと言葉を吐きだす。ドローレスは自分の膝を痛くなる程握りしめて、涙の代わりのようにして言葉を零した。

が私を誰かとして見ようとも。

私はあくまで、私でありたいのだから。

「私が私である限り、偽物ではないでしょう？ 誰かに誰かを押しつけられるから偽物になってしまうだけで」

「……アリス、ありがとう」

ぼつりと、言葉が零れおちた。顔を上げると、隣に座っている偽海亀が泣きながら微かに笑っていた。

「ぼくらを否定しないでいてくれて、ありがとう。ぼくらはどこまでいっても本物にはなれないけれど、きみは、ぼくらを否定しないんですね？ 偽物だと、言わないんですね？」

「言わないわよ……言えるわけがないわ」

ドローレスは絶え絶えになりながらも、偽海亀に言葉を返した。

偽海亀はやはり涙をこぼしながら、それでも微かに笑った。グリフ

オンを見上げて、穏やかに呼びかける。

「ねえ、本人がどうありたいかという事、でしょう？ グリフォンさん、あなたも素直になつたら？」

「……うるさい。俺様は俺様だ、偽海亀が口出しするな。俺様は誰に何と言われようと、孤高グリフォンの王であり続けるだけだ」

ふん、と鼻で笑つて　しかし先程のように嘲るのではなく、どこか子供っぽい照れ隠しのようだ。背中グリフォンの翼がばさりと揺れて、ひらひらと羽が舞い落ちる。

ドローレスはそれを見て、少し笑みを浮かべた。取っ付きにくい人だと思つたが、案外可愛い所もあるようだ。グリフォンはドローレスの思いに気付くことなく、胡乱気な表情で偽海亀を見下ろした。「おい偽海亀。俺様は退屈だ。お前の歌を聞いてやらんでもないぞ」「聞きたいのなら、そう言えばいいのに」

「違う。俺様がお前に頼むわけがないだろう。お前が歌いそうにしていたから言つてやつたまでだ」

苛々とした表情を浮かべて、グリフォンが痲癩を起こすように言う。偽海亀は零れる涙を拭いて、力なくぐんにやりと垂れていた尻尾を拍子をとる様に揺らした。鼻をすする音が切れて、波の音の中に小さな囁きが混じる。

最初は、波間に囁くような小さな旋律メロディーだった。静かな波の音と偽海亀の擦れた声ハモニーが和声を奏で、それは次第に存在を大きくさせていく。

低く低く、うねる様に。高く高く、轉る様に。偽海亀が歌っている姿を見ていると、最初の卑屈で泣き虫なイメージが払拭されていく。否、どちらであっても、彼は彼で、偽海亀ほんものだろうけれど。

と、遠くで騒がしい声が出た。多くの人が口々に言い合い、「裁判が始まるぞ！」と叫んでいるのが聞こえた。ドローレスは歌い続ける偽海亀を見て、それをただ聴いているグリフォンを見て、立ち上がった。二人に軽く一礼し、背を向けて走り去る。だんだんと海の音も偽海亀の声も聞こえなくなり、人々のざわめきが大きくなっ

た。
一体、何があったのだろうか。

Chapter 13 real imitation (後書き)

サブタイトルは『本物の偽物』。偽海亀は海亀であろうとするから偽物なのであって、自分を否定しなければ偽海亀として本物の自分であるというお話。

- - - - -

一部改稿しました。

次話、ドローレスの正体が明かされます。

Chapter 14 stolen Maiden (前書き)

3 / 16 改稿しました。

Chapter 14 stolen maiden

盗んで、食べて、全てを壊して。

甘くて素敵な、可愛い少女^{キミ}を。

貴方の罪は、いくつある？

Chapter 14 stolen maiden

騒ぎ声のする方向に向かうと、そこには大きな建物があり、その入り口では絶え間なく人が出入りしていた。と言っても、人間だけではなく、正装したインコやトカゲまでいる。建物の中でぎゅうぎゅうになりながら座っている人たちも、おそらく全てが人間ではないだろう。白兔やチェシャー猫のように人間になれる獣もいるのだから。

ドロレスは人ごみの中をすり抜けて、裁判所の隅に座った。そこからはちょうど、被告人の姿が良く見えた。ハートの女王の座る台座の前に、鎖で繋がれて焦燥した顔で立っている。罪人と言われるくらいだからもつとおどろおどろしいのを想像していたのだが。

と、木槌が空気を割る様な音をたてた。「静粛に！」と柔らかなテノールが響き、ざわめいていた傍聴席が少し静かになる。ドロレスが聞き覚えのある声に目を向けると、訴状を持って女王の傍に立っているのは、白兔だった。女王は冷めた表情で白兔に目をやり、口を開いた。

「告知員、訴状を読みあげなさい」

「女王様がお作りになられたタルトを、盗んだ罪にございます。被告人はハートのジャックです」

ざわつ、と傍聴席がざわめく。悲壮感溢れる空気に反して、ドロレスはその余りに平和的な罪状に呆気にとられていた。ここまで大仰な場を用意しておいて、タルトを盗んだ罪。もちろん窃盗だっ

て罪には違いないが、どうにも締まらない。

再び白兔が「静粛に！」と叫び、ざわめきが収まった。女王はたつぷりと間を開けて、白兔に短く指示する。

「最初の証人を」

「はい。証人第一号、ここに」

白兔の声に傍聴席の中から小さな人影が固まって出て来た。帽子屋と三月兔と眠り鼠だ。眠り鼠以外は手にティーカップを持ち、困ったような顔を見合わせている。

沈黙の後、ようやく帽子屋が口を開いた。

「すみません、女王様。まだお茶会が終わっていないものですから」
「お茶会？ もうそんな時間ではないと思うけれど」

女王は片眉を上げて、不機嫌そうに声を上げた。帽子屋は顔色を変えたが、三月兔は変わらぬ態度で左右の指をでたらめに折り伸ばし数えていた。そしておもむろに首を傾げながら答える。

「確か、三月からずっと。15日だったか？」

「14か、15か、16か、そのくらい」

眠り鼠で眠り鼠が付け足して、ふわぁ、とあくびをした。三月兔に支えられて居なければ、今にも倒れて寝てしまいそうだ。

女王は三人を眺め、一番手前に立っている帽子屋を見下ろして言った。

「この事件について、何か知っている事は？」

「いえ、何も。思い出せる事はありません。三月兔の家ですっと、お茶会をしていましたから」

びくびくと震えながらの返答に、女王は不機嫌そうな顔のまま深く頷いた。そして三月兔の方に目をやる。

「三月兔、お前もか」

「バターパンは喰ったけど、タルトに覚えはねえな。眠り鼠もそう
だろ？」

「ん……アナベル・リーはあったけど、タルトはいなかった」

三月兔は飄々と、眠り鼠はうつらうつらとしながら、ようやく答

えた。陪審員がそれぞれの答えを書き取ると、女王は「下がって良し」とだけ短く言った。三人はその言葉が聞こえ終わるよりも早く、何処かへ消えてしまった。

ドロレスももはやこれくらいでは不思議だとも思わない。その内また、三人そろってティーカップ片手にひよっこり現れるだろう。

白兎は何処からか紙束を取り出し、それを忙しなく捲った。女王が「次の証人を」と言っただけで急かし、白兎の手からひらひらと紙が零れる。

ドロレスはその光景を見つめて、今度は一体誰だろうかと期待した。チェシャー猫がにやにや笑いと共にふわりと現れるかもしれないし、意外なところで芋虫かもしれぬ。

そして白兎のテノールが、鋭くその名前を呼んだ。

「アリス！」

「わ、私？」

アリス、と呼ばれた為すぐには反応出来なかったが、ドロレスはおっかなびっくり立ち上がった。ざつ、と傍聴席や陪審席の視線が一斉にドロレスへと降り注いだ。帽子屋のように前に出て、ハートの女王を見上げる。薔薇園で会った時とは全く違う、冷めた、冷たい顔。

「この一件について何か知っている事は？」

「何も、知りません」

怖々と、しかしそれだけははっきりと言う。本当に何も知らないのだから。曖昧な事を言っただけで、免罪でもかけられたら堪らない。

女王は胡乱な表情を浮かべた。と、白兎が何処からか紙束を取り出した。かなり量があり、一冊の本になりそうな程の厚みがある。「女王陛下、新たな証拠が届きました。何やら手紙のようです。被告人が牢で書いた物のようで……いや、手紙ではありません。これ

は、詩でしょうか」

「読んでみなさい。始めから始めて、終わりまで続けなさい」

女王の言葉に、白兎は紙束を整えてちらりと目を走らせた。口を開き、始まりから始めようとしたが、

「私が書いたものだと言われているその一片の紙切れに綴られたインクの滲みの羅列に、一体全体どんな価値が意味が理由が、そうそれはつまり私が含んだとされている意図が、含まれているのかなど私にも要するに未だただのランプのカードの一枚でしかないハートのジャックにも検討など付かないのだがさてこれらを理解し意図を解き明かしてこの文字列に秘められた想いをさらけ出すなどという大役をさて誰が出来ると言うのであろうかね？」

突然の事だった。それは目に見えた、変化だった。

いつの間にそこに現れたのだろう。否、最早いつ現れたのかなどこの世界においては関係ない。先ほどまでうるたえたハートのジャックだったそれは、壮年の男性となっていた。40歳程に見えるが、その顔立ちは老いよりも成熟を感じさせ、整った作りは若い頃の美貌を想像させた。茶色の髪がほつれる様に額に垂れて、碧の瞳はぼうつとして宙を見つめている。

どくり、とドローレスの心臓が存在を大きく主張した。耳になじみのある柔らかなテノール、見慣れた顔立ち、身体の芯を震えさせるその存在。身体の中で猛狂う衝動が彼から目を逸らす事を許さず、知らず知らずのうちに息を止めていた。

白兎は眼鏡をかけて、紙に目を落とした。気味が悪い程の無表情で、朗々とその紙に綴られた文字を読み上げる。

「……これは、我が生の灯ともにして我が性の焰。私の罪、そして私の命そのもの……」

「や……いや……」

ドローレスの身体が強張り、汗がじつとりと首筋を伝う。歯が鳴り、寒気に身体を両腕で抱きしめるが、依然として変わらない。ただひたすらに否定の言葉を口走るが、それも意味を成さない。

「だめ、駄目……それは駄目なの、お母さん、助けてお母さんお母さんたすけて……ッ」

白兔の声は続いていたが、その大半はドロレスの耳に入っていなかった。ぱさ、ぱさ、と読み終わった紙が床に捨てられていき、ひらひらと優雅に宙を舞う。そのどこか戯曲的な景色とは相反するように、淡々と声は続いた。

「……朝の彼女はロー、ただのローだ。片方だけ靴下をはいた4フイート10の彼女はローラだ。学校ではドリー。署名欄の線の上では彼女はドロレスだった。しかし、

彼女は私の腕の中では、いつも “ロリータ” だった」

「いやああああああああああああああああああッ!!」

彼の声に半ば被せる様にして、ドロレスの悲鳴が上がった。

壮年の男がドロレスを見つめ、熱に浮かされたような、恍惚とした表情で唇を震わせる。

「ロウ、リー、タ……」

男　ドロレスを愛した現実、ハンバート・ハンバートが、そこには居た。

Chapter 14 Stolen Maiden (後書き)

サブタイトルは『盗まれた少女』。

ドローレスは、ロリータです。

ロリータというのはドローレスの愛称の一つで、「ロリータコンプレックス」の語源にもなった『ロリータ』という小説から来ている。

白兔が本文で読み上げたのは『ロリータ』冒頭部分の一部です。

新訳・旧訳を交えつつ、分かりやすいように変更した点もあります。一応、原文を読んだ上での判断です。

ドローレスの性格が原作とはかなり違いますが、これはハンバートを拒絶するドローレスなので、ご了承ください。

では引き続き、よろしく申し上げます。

一部改稿いたしました。

幕間？ ： 彼の手記

少年は少女に恋をし、少女も少年に恋をした。
夢は現に。幽玄なる孤島の霧は見えない。
物語はこれから。終わりはすぐに。

幕間 彼の手記

出会った瞬間、それは運命なのだとは分かった。

外見こそ似ていないものの、彼女が内包する魅力は間違えようはずもなくあの夏の日の少女と同じものであり、私が求めて止まないものであり、私が求めて病むものなのだ。どれ程時が経とうともこの身が老いてあの日の少年の恋に不分相応な物と成ってしまった居たとしても、私が求めざるを得ない初々しい未熟さに満ちた妖精もしくは狂いそうな魔力を孕んだ悪戯好きの悪魔だろうか。

嗚呼、そんな戯言を繰る程の余裕もなく、私はその時彼女に全てを奪われていた。心を、魂を。そしてまたそれこそが、私の穢れなく純粋な罪を犯す全ての始まりでもあった。

あの瞬間は、今でも鮮明に思い浮かべる事が出来る。

スプリングラーの水を浴びて、艶めかしくも無垢に私を見上げる一人の少女。白い膝丈のワンピースは肌に張り付き、濡れた布の向こうの白い肌を間接的にも顕わにしていた。胸元のリボンも濡れて肌に張り付き、その陰に隠れた事でより一層の欲望を掻きたてる。まるで誘うように、少女はそのままの姿で私へと歩み寄った。

あなた、だれ？

繊細な砂糖菓子ではなく、極彩色に彩色されたケーキの様な。どこか斜に構えた、大人びようと背伸びする挙動と反するように、その声はどこまでも甘く幼い。その身から醸し出される蠱惑的な魅力

はこれでもかと情欲を焚きつけると言うのに。

隣に立つ母親に何か言われたのか、彼女は顔を顰めて俗語を吐いた。私の耳には入らなかつた。彼女は私を見た、その青みがかつた灰色の双眸に私を映して悪戯っぽく笑つた。

ママとなかよくしてね、わたし、あたらしいパパが欲しいの

嗚呼、それは彼女の最初のおねだり。私は口煩い女と生活する条件を呑み、その家で彼女と暮らす事を選んだ。それ以外に、何を選べば良かったのだろうか。私にはもう彼女しかいなかった、彼女を手にするのでしか、この想いは収まらなかつた。

否、彼女を手に入れてこそ私は完璧になれるのであり、それまでの私は無様な片割れにすぎなかつたのだろう。あの夏の日からずっと。

そう、私には分かつたのだ。

ロリータ彼女こそ、私の求めていた彼女だと。アナベル

ローラ、可愛い愛しい私のロリータ。

ブロンズのように輝くその柔らかな茶色の髪も、無邪気に煌めく青みのかかつた灰色の瞳も。日に焼けて少し色づいた肌も、華奢で小さなその身体も。

靴下を片方だけ履いて家の中を歩き回る、子供らしい無作法さも湖にピクニックに行きたいとねだつて笑う顔も、雨が降つて行けなくなり癩癩を起して泣く顔も。子供扱いしないでと、頬を膨らませて拗ねる仕草も。甘い物が大好きで、お菓子はチューイングガムが一番好きな味覚も。夜中にジャムを食べようとしてキッチンに忍び込んで、見つかつて怒られるお粗末な行動も。

君のその身体も魂も、心も精神も、全てが愛らしく愛しい。指の間を流れる髪の一房に至るまで、大人びた香水の香りのする身に着ける布の一切れまで、さくらんぼのように赤く艶めいた唇で食むそ

の一齧りまで、君のある生活の時が止まる程美しいその一瞬まで。

ロリータはニンフェットだった。9歳から14歳という短い限られた時にしか存在しない、霧に包まれた幽玄にして有限の海の中の孤島に暮らす妖精のような存在。美しいとは限らない、可愛らしいとは限らない、不潔で下品なものであったとしても神秘的で奇妙な優美さを損ないはしない。そこには、一回り以上年上の男性を魅惑し、捉えて離さない魅力が存在する。

彼女たちの多くは、自分がその魔力のような魅力を持っている事に気付かない。だが、たしかに彼女等は存在し、彼女らに惑わされた狂った男たちによって発見される。

彼女たちを私はニンフェットと呼ぶ。悪戯好きの妖精のようであり、男を狂わせる蠱惑的な小悪魔じみた、蝶になる以前の初々しい若虫のような彼女たちを。そんな彼女たちに狂う私のような孤独な旅人を、ニンフェットニンフォレブス狂いと名付ける様に。

素晴らしい、本当に素晴らしい、私の、私だけの、ロリータ。

彼女を愛するに至るまでには、彼女の先駆けとも呼べる少女が居た。

十三の時に公爵の浜辺で出会った、一つ年上の少女。彼女とは話が合い、すぐに仲良くなり、そして、嗚呼、その瑞々しく溢れる様な魅力にどうして惹かれずにいられたらだろうか。あの夏の日々こそ、私の人生が最も純粹に輝いた時間だった。

私たちは幼かった、周囲の大人たちは私たちを二人きりにはさせてくれなかったが。故に私たちは、その秘密の時間を手に入れる為に、まるで重大な事件でもあるかのように慎重に嘘を重ねた。一度目は眠り草の繁みの中、星降る夜に。二度目は薔薇色の岩の紫紺ラズベリーの影で。

幼稚な知恵を凝らした逢瀬は二度とも達成されることなく、私た

ちは夏の終わりと共に引き離された。私は三度目の逢瀬を望み、彼女こそが私の人生なのだ。と心の中で繰り返した。

そして、彼女は死んだ。

冷たくなり、永遠の眠りについてしまった。嗚呼、奇しくもそれは誰かが詠った詩のように。

私は絶望した。私はそこで一度死んだのだ。時間は灰色に塗り潰され、私の思春期はただの棺桶の中の様な時間だった。そう、私は彼女に囚われたのだ。冷たく暗い棺桶と共に閉じ込められる様に、私は彼女と共に死んだ。私の心はどれ程の年月が経とうと彼女と共に死に続けた。

そして私は出会ったのだ。

あの初夏の日に、スプリングラーの下で笑む少女に。彼女を思い起こさせる彼女に。彼女の次の彼女に。

愛しい私のロリータ。君は紛れもなく、

“僕”のアナベルの生まれ変わりだ。

幕間？ : 彼の手記（後書き）

『ロリータ』ダイジェスト。ハンバートさんの気持ち悪い語りを詰め込んでみた。

改稿に際して追加。

Chapter 15 the memorial narrates

それは始まりの音、終わりの名前。^{スタート}^{エンド}

それから始まりそれで終わる。そして中身もそればかり。

さあ、それって一体なあに？

Chapter 15 the memorial narrates

“Annabel”

その手記には潜む様に微かに、しかし紛れもなく愛が綴られていた。アナベル。繰り返される綴りは本筋から外れる様にして存在しており、しかし本筋を無視してでも綴られる価値ある物なのだと、筆者は語るように何度モインクの染みを作る。

小さな黒革の手帳。教師と言う職にそれが不応な物なのかどうか、ドローレスは知らない。が、その中身が彼にとってどれ程の価値を持つのかだけは、拙い語力でも読み取ることが出来た。

そつと文字をなぞる。模様の様に崩された筆記体は、慣れないドローレスには少々読みづらい。しかし、丁寧にそれを読み解けば、そこには甘美に綴られた愛の記憶が広がっている。

“Lolita”

散らばるように、そこかしこに見受けられるその染みは、ドローレスの胸を押しつぶすようだった。ロリータ。彼女の愛称、いつだってそれは代用品でしかないのだ。^{アイラユー}愛を囁く言葉の代わり、囁く誰かはい体誰なのかを咎めずに。

その言葉を向けるのは彼が愛する少女、しかしその少女とはいいたい誰なのだろう。考えるまでもない、言葉は台詞に過ぎず、所詮は手段に過ぎない。誰が考えるだろう、言葉へ愛を囁くだなんて。手段が愛して貰えるだなんて。

「彼にとって、私は手段だった。もう二度と手に入らない人を手に入れる夢を見る為の、道具にすぎなかったの」
「そうして貴女は夢の世界へ逃げ込んで来た」

ドローレスの声に応えるように、少女の声が真つ白な世界に響く。手帳を膝に乗せたまま振り向くと、そこには見覚えのある少女が立っていた。

「……眠り鼠、ここはどこなの？」

「描かれることの無かった、不思議の世界の続きの頁。不思議の国の終着点よ」

につこりと、柔らかい笑みで眠り鼠は答えた。

遠近感すら失われる白い世界の黒いネグリジェは、白紙にぼつりとインクを零したように映えていた。

ドローレスは薄暗い裁判所で悲鳴を上げて、気付けば手帳と共にこの真つ白な世界にいた。惹かれるように頁を捲れば、そこにはただひたすらに愛が綴られていた。それは紛れもなく、記憶よりも確かな彼の手記だった。

眠り鼠はドローレスと向かい合うように座り、そつとその手をとった。お茶会に居た頃よりもずつと大人びて感じるのは、彼女がはつきりとその瞼を開けているからだろうか。

「……パパが、欲しかったの」

「本当の父親は幼いころに死んでしまったから」

「ママが、好きだったの」

「喧嘩ばかりするけれど、それも愛情だと知っていたから」

「彼は、……彼は、ただあの子が好きだった」

ぼつり、ぼつり。インクを垂らすように、白い世界に黒々とした言葉を落とす。不思議の国の終着点とはいったい何なのか、何故眠り鼠がドローレスの『現実』を知っているのか。分からないことが

溢れて溺れそうだが、そんなことはどうでもいいのだ。今はただ、吐き出して目を背けたい。

「でも無理なのよ、それは絶対に無理なの。私は彼の愛する少女ではないの、私は私、ドローレスなのよ」

そして、ぽつり、と。ピリオドのようにドローレスは言葉を落とした。

「私はここに居るのよ」

幼い頃に父親を失い、母親と二人で暮らしていた。だから彼が家に下宿する事になった時は素直に嬉しかったし、母親が楽しそうにしていたから喜んだ。からかって「パパ」と呼べば、本当の娘のように可愛がってくれた。格好良く優しい父との生活は幸せだった。

愛しているよ、ローラ。その言葉が、意味が、変わっていったのは何時だったろう。否、それはきつと最初から、奥深くに根付いていたのだ。

ある日家に帰ると、自分の部屋のドアが半開きになっていた。怪訝に思い中をそっと覗くと、背の高い後ろ姿。彼はうっとりとした表情でドローレスの洋服ダンスを開けて、何枚かの服を抱きしめて顔をうずめていた。

何も、言えなかった。

何も、なかった事にしたかった。

気付けば彼の行動はエスカレートしていった。母親を執拗に避け、ドローレスをくどい程に甘やかす。怪訝に思いながらも、ドローレスは目を逸らし続けた。気付かなければ無かった事になると思いついたし、彼がたまたまそういう気分だったのだらうと無理矢理自分に言い聞かせた。

だから、異常が蔓延し、飽和しても、目を逸らし続けた。彼は母親と寝ようとしなない、強力な睡眠薬を妻に盛ってまでしてだ。ドローレスの願いはなんでも叶えようとし、ドローレスの欲しい物はなんでも買い与えようとする。日に日に母親に対する態度は悪くなり、あからさまに嫌そうな顔をする時もある。ドローレスが男の子と遊

んで帰ると、何処の男だ、名前は、年は、としつこく聞いてくる。

彼の部屋の机には、いつも鍵のかかった引き出しがあった。ドロレスが隙を見てその中を覗いたのは、部屋に侵入された仕返し程度のつもりだった。そこに入っていた本に書かれていたのは、母親に対する陰口悪口罵詈雑言と、ドロレスが如何に愛らしいかを語った夢現の文章。まるで観察日記を付けるかのようにこと細かに書かれた自分の描写に、頁を捲る度に寒気が走った。

そして、丁寧丁寧に綴られたアナベルという少女の事。少年の日の淡くおぼろげな思い出。ロリータにどこか似た少女　否。

少女を彷彿とさせるロリータ。

自分自身が愛されているというのなら、ドロレスも彼に向き合うことが出来たのかもしれない。ただ純粹にドロレスを愛するかどうかのなら、それは家族愛として許容できたのかもしれない。だけど。

貴方が見ているのは、愛しているのは、私アナベルじゃない。

過去の亡霊とやり直すかのように、彼はドロレスを甘く愛する。嫉妬に狂った母親は、娘を一人の女として嫉んだ。

狂っている。壊れている。イカれている。この家も、親も、日常も。表面上は仲の良い家族であるにも関わらず、その中は何処までも底までも暗く濁って澱んでいる、歪な家族劇。

だからドロレスは、白兔に飛びついた。現実から逃げ出し、優しい夢を見る為に。

ハンバートの夢アナベルから逃げる為に。

タイトルは『手帳は語る』。手帳＝メモリアル＝鍵の掛かった秘密(6話)、です。

眠り鼠が再来したり、ドローレスの心情を吐露する話。一応、私
なりのロリータの形ということだ。

冒頭詩は原作『ロリータ』の始めと終わりの短語が両方「ロリー
タ」であることからきています。ロリータで始まりロリータで終わ
る。

とあるなぞなぞから文章を取りました。

Chapter 16 youth without youth

人は夢、夢は蝶。世界は夢、夢は物語。

ワンダーランド
不思議の国に彷徨って、歪な現実から目を背け。ロリータ

迷子になった、君は誰？

Chapter 16 youth without youth

沈黙の後、ドローレスは眠り鼠へと目を移した。

「……貴女は、一体何なの？」

「眠り鼠、よ」

眠り鼠はやはり落ち着いていた、大人びた様子で答えた。

「不思議の国へ迷い込むアリスの対となる存在、アリスが目を逸らす現実へと至る 키워ド、それが『眠り鼠』の役割なの」

アリスの対。ドローレスはその言葉に、改めて彼女の姿を見た。

ドローレスの目と同じ色の短髪、ドローレスの髪と同じ色の少したれた目。フリルとレースに飾られた黒いネグリジエと、シンプルな白いワンピース。アクセントの胸元のリボンは似ているが、色は眠り鼠がピンクであるのに対しドローレスのものは紺色だ。

「確かに、全くの反対ね」

「それでも反対ということとは、同じベクトルの上にあるのよ。そこに正負の違いはあれど、絶対値は変わらない」

眠り鼠の言葉に、ドローレスは首を傾げた。自分とそう変わらない年齢の少女の口から語られるには、あまりに堅苦しく難しい言葉の羅列。

「……意味わかんない」

「じゅめんなさい」

くすくす、と笑みを零す仕草も、どこか外見に反した印象を受ける。ドローレスの姿の反対であるということなら、彼女もまた『公

爵夫人』のように元の姿とは違うのかもしれない。

「『眠り鼠』はこの不思議の国という夢の中でさえ眠り続ける唯一の『登場人物』。夢の中の夢は、『アリス』のあるべき現実へと繋がっている」

夢の中の夢。その言葉にちくりと胸が痛む。何故だろうとも思いつながら、ドローレスは眠り鼠の言葉を聞いた。その理由など思い当たらないし、痛いことを思い出そうとも思わない。

「ルイスは、胡蝶の夢、と言っていたわ
「ルイス？」

胡蝶の夢という聞きなれない言葉も気になるが、ドローレスは覚えのある名前に反応した。ハートの女王が言っていた名前。この世界を創った人。

「貴女も、ルイスを知っているの？」

「ええ、知っているわ。ルイス・キャロル。この世界と私たちを創った人。私たちの親とも呼べる存在」

「お父さん、なの？」

その言葉に、ドローレスは少し声色を硬くした。今のドローレスにとっては、あまり意識したい言葉ではない。眠り鼠は少し目を丸くし、笑みを和らげた。

「そうね、そうとも呼べるかもしれない。尤も、ルイスを知っている『登場人物』はそう多くはないから、呼ぶ人もいないでしょうけど」

少し、残念かしら、と眠り鼠は笑んで、

「貴方もそう思うのかしら、ルイス」

ドローレスの後ろへと、笑いかけた。

眠り鼠の言葉に驚いて振り返ると、少し離れたところに一人の青年が立っていた。カールした艶やかな茶色の髪と、澄んだ青い瞳。

柔らかく微笑んだその顔は見蕩れる程に整っており、すらりとした体格がそれを裏付けていた。

ドローレスが気付いた事を察したのか、彼は嬉しそうに頬を緩めゆっくりと歩み寄った。びく、とドローレスの肩が跳ねあがり、足が一步下がる。年上の男性、というだけでも十分に怖がってしまうのだ。

気分を害するだろうか、とドローレスはそっと窺った。が、彼は気落ちしたように寂しそうな表情を浮かべて立ちすくむだけだった。その子供じみた仕草にドローレスは警戒を緩めて、口を開いた。

「貴方が、ルイス・キャロル？」

ルイスはにこりと笑みを浮かべて頷いた。やはりその笑みは無邪気で、大人に見えるのに子どものようなようだ。

と、ルイスはおもむろに芝居がかった仕草でドローレスへと右手を差し出した。掌を上差し出したので握手というわけでもなさそうだが、どういう意味だろう。

首を傾げるドローレスの目の前で、とすりと軽い音をたててポシエットが落ちてきた。慌てて上を見上げるが、地面と変わらぬ白い空が広がっているだけだ。手品のようだと目を丸くするドローレスに、ルイスはポシエットを差し出した。

どこか見覚えのあるそれを受け取ってそっと開けて中を見ると、そこには小ビンが入っていた。瓶の中身は、ちょうど一口分ほど減っている。ドローレスはそれを見て、ルイスを見上げた。

「ドロー鳥さん、なの？」

こくり、と。無言の肯定を返してルイスはドローレスへ柔らかかなまなざしを向けた。確かに、そのあどけなく純粋な目は、あの拙く語る不恰好な鳥を思い起こさせる。

「まだ目覚めていないみたいだね」

「え？」

不意の眠り鼠の言葉に、ドローレスは疑問の声を上げた。眠り鼠はにっこりと笑いルイスに寄り添う。

「ルイスはそう言いたいみたい。どういう意味かは分からないけれど」

「……ルイスは喋れないの？」

唇も動いていなかったし、確かに何も言っていないかったのだが。

ドローレスの訝しげな視線に、眠り鼠は口を開いた。

「ルイスは喋れないのではなく、喋らないだけ。それを通訳するのも私の役目だから」

表情だとか、雰囲気で私には伝わるの、と続けて眠り鼠は苦笑した。眠り鼠がルイスに寄り添う様子は、外見年齢の所為かとても親子には見えなかった。が、ルイスが眠り鼠に向ける眼差しには、確かに子供を慈しみ愛する感情が見て取れた。

まるで、ドローレスが一番欲したものを晒すように。

「……ここは夢の中なんでしょう？ 目覚めていないのも当たり前だわ」

苛立ちを混ぜた言葉をぶつけると、ルイスは困ったように目を細めて首を傾げた。その仕草を追いかけるようにして眠り鼠の声が添えられる。

「君はまだ夢の中の夢のままだ」

「だから、ここが夢なんでしょ？」

「現実こそ、最後の頁に相応しい。故にもう目覚めなければならぬんだよ」

まるで噛み合わない、合わせる気がないような言葉のやり取り。

会話とは呼べないだろう。眠り鼠の声を借りているから余計に違和感がある。

「君が逃げてきた現実には、本当にその形をしていたのかい？」

ねえアリス、と。ルイスは問いかける。決してドローレスの名前を呼ばず、ただアリスという役割を突きつける。青い眼差しには、眠り鼠に向けていたような温かみはない。

「二年の遅刻は、いったいどこから数えたのかな」

「え……」

「ねえアリス、遅刻したアリス、何度目かも分からないアリス。君の最後の名前はなんだい？」

それはいつだったか、チェシャー猫に問われた言葉。ロー、ローラ、ドリー、ドローレス。そして、本当の名前、最後の名前、彼の腕の中の名前、ロリータ。

けれどそれは、ルイスの問いかけの意味は、奇を銜うことなくそのままだ。

ああ。

分かった。

やっと分かった。

彼の繰り返し『夢』の意味が。現在の自分と言う存在の儚さが。

そうだ、これは泡沫の夢に過ぎない。不思議の国に漂った泡沫の夢。現実から逃れるために、夢の中でまで夢を見続けたのだ。

不意に。

淡い紫の奔流が、視界を覆いつくす蝶の群れがその真つ白な世界に色を添えた。白紙の世界に色つきのインクを零したかのように、世界は瞬く間に淡い紫の流れに染められていく。眠り鼠が目を丸くし見守り、ルイスは変わらぬ笑みを浮かべて飛び去っていく蝶を眺める。

蝶の群れは止め処なく、ドローレスの立っていた所から溢れていた。というよりも、まるでドローレスの中から弾け飛び、溢れ出るようにして蝶の群れは生まれていた。その中心を窺うことなど出来ず、ただただ零れ続ける。

蝶は次第に数を減らし、その代わりとでもいうかのように世界を淡く染めた。ひらひらと、ゆらゆらと。紙に染み入るように淡い紫が白に霧散し、ゆっくりと、彼女は目を開けた。

ルイスは笑みを浮かべ、まるで初めて会ったかのように優雅な礼をした。眠り鼠もそれに倣い、嬉しそうに唇を開く。

「おはよう、ドローレス」

「目の前の霧が晴れたみたい。すっかりして何もなくて……ほんと、

最悪の目覚めね」

細く伸びる四肢、丸みを帯びた身体。先ほどまでの白いワンピースではなく、女学校の制服。声は少し変わって高く澄み、相貌にもあどけなさはない。

「おはよう、かしら。それともここはまだ夢の中？」

十四歳の本来の姿となったドローレス　ドローレス・ハンバー
トは、皮肉気に口の端を歪めた。

Chapter 16 Youth without youth (後書き)

タイトルは『若さなき若さ』。

「胡蝶の夢」をテーマにした映画のタイトルで、日本での名称は監督の名前から「コッポラの胡蝶の夢」となっています。

眠り鼠とルイス・キャロル、およびドローレス・ハンバートの話
ルイスは何も喋らない、というのは改稿しても変わらないこと
です。眠り鼠の参入により、語りは彼女に任せました。

ちよつと腹話術みたいだが、実際はどちらかというと逆。

Chapter 17 dolorous dream

アリス
AとしてDは迷い込む。

ドジンルイス

DがLとして創った世界に。

ロリータ

アナベル

Lの名前をAと共に忘れるために。

ぐるぐるぐるぐる、果てなき遊びは終わるのだろうか？

Chapter 17 dolorous dream

ドローレス・ハンバートは、14歳の少女である。それが何よりの現実だった。

既に亡き父親とシャーロット・ヘイズの一人娘として生まれた。

12歳のとき、母がハンバート・ハンバートと再婚をし、姓をハンバートと改めた。

そして、養父ハンバート・ハンバートに歪んだ愛情を向けられた。

白兔は間違えていなかった。現実からの逃避の塊である夢へ、12歳のドローレス・ヘイズを迎えに来たのだから。

アリス・リデルよりも二年遅く、ドローレス・ハンバートよりも二年前に。

「……随分と、寝惚けていたみたいね」

吐き棄てるようにドローレスは言い放ち、ルイスと眠り鼠を見た。

「ママが死んで、パパに浚われた。そんな基本的なことすら忘れて、不思議の国だなんて」

「全てが見えなかった訳ではないさ」

ルイスの言葉に、ドローレスは胡乱げに視線を流した。その視線に柔らかな笑みを返し、ルイスは空に指を滑らせた。指の先からインクが零れ、白い空中に文字が浮かぶ。Mad Hatter（イカレ帽子屋）、と流し読んでから気づいた。ドローレスから見てもう

見えたということは、ルイスは鏡文字をすらすらと書いているのだ。続けてCaterpillar(芋虫)、Duchess(公爵夫人)、Knave of Hearts(ハートのジャック)、と『登場人物』を羅列する。それを一通り読み終え、ドローレスはルイスを見た。

「……これが、どうしたつて言うの」

「答え合わせをしようか」

ドローレスの言葉に応えるかのように、文字はするすると解けてインク色の絵を描き出した。公爵夫人とハートのジャックの顔が描かれ、ドローレスは唇を真一文字に結んだ。ただ、目を逸らさずにそのインクを見続ける。その下にシャーロット・ヘイズ、ハンバート・ハンバートと余ったインクが付けたされた。

そして華美な帽子を被ったどこか懐かしい顔の少年を描き終わると、インクは再び文字の形をとった。芋虫の顔の下にも文字が綴られ、ドローレスは時の凍る音を聞いた。

ハンバート・ハンバート、アナベル・リー、と。

「君は手記を読んだ。彼の過去を読んだ。それは確かに君の中にあっただよ。この不思議の国に反映されていたんだ。ハンバート・ハンバートにアナベル・リー、夏の日に会った彼らの想いは君の中にあつた。だから『帽子屋』は『芋虫』に惹かれたのだし、『眠り鼠』はアナベル・リーを暗唱したのだし、『グリフォン』と『偽海亀』は公爵の海でアイデンティティを求めた。君は不思議の国でまどろみながら、君の現実を旅してきたんだ」

中空に浮かんだ肖像画に目を向け、ドローレスは細く長く息を吐き出した。

「……道理で、見覚えがあるはずだわ」

帽子屋に会ったときに感じた妙な既視感。たとえ年月を重ねていなくとも、彼の顔が分からないはずがない。芋虫に海辺が似合うと感じたのもその通り、ドローレスの中のアナベルのイメージが海辺の少女なのだから。

「不思議の国の癖に、現実が入ってくるのね」

「この不思議の国は、どうしてかそういうものだから」

ルイスは閉じた唇を少し曲げ、ドローレスを見た。無邪気なビー玉のような、無機質なガラスのような目が覗き込めない意図で沈んでいる。沈んでいると、感じた。

「この世界にやってくる『アリス』が望む夢を、理想の夢を見られるように創ったはずなのに。世界はいつも決まって、『アリス』の現実を映し出すんだ。どうしてだろうね、『アリス』は現実から逃げてきたはずなのに」

「そんなの、決まってるじゃない」

眠り鼠の声を遮って、ドローレスは口を挟んだ。唐突に閃くように、ただ答えを知っているという感覚に突き動かされる。そう、自分分は答えを知っている。

ルイスは不思議そうな顔で首を傾げ、眠り鼠も訝しげな表情を浮かべる。まるで親子のようによく似た仕草を見つめて、ドローレスは口を開いた。

「現実が大切だから、思うように行かなくて歯痒いのよ。現実が大好きだから、嫌いになりきれなくて目を背けて逃げるんじゃない。理想の夢ってことは、要するに欲しいと思ってる現実ってことでしょ」

父が大好きだった。母が大好きだった。だから、夢の中まで連れてきた。

彼らが居なければ、理想の世界とはなりえないから。たとえ現実を見つめることになるうとも、彼らが居なければ意味がない。それは、ドローレスの望んだ世界ではない。

望んだのは、家族の笑顔だった。

手に入らなかったのも、家族の笑顔だった。

「……………この世界でなら、叶うかもしれないよ」

「夢は所詮、夢じゃない」

口元が歪み、引きつったような笑みが零れる。ドローレスの夢が叶わないことは、彼女自身が良く知っている。父の歪んだ愛も母の醜い嫉妬も、知ってしまったのだから。

それでも願わずに居られなかった。だから不思議の国へとやってきた。

「夢じゃ、現実の代わりにはなれないわ」

誰かが、誰かの代わりになれないように。

ルイスは顔に悲しげな表情を浮かべ、眠り鼠を抱きしめていた。まるで、遊び足りない駄々をこねる子供のように。離したくない誰かを、抱きしめるように。

わななくように、彼の唇が何かを紡いだ。が、やはり言葉が語られることはなく、ただ無音が吐き出される。

「……………夢は、終わりなのね」

そっと囁くように、眠り鼠の言葉が語られた。ドローレスはそれに応えるように、笑みを浮かべた。

「そろそろ、起きる時間だわ」

Chapter 17 dolorous dream (後書き)

サブタイトルは「痛ましい夢」。

Dolorousとは元々、「悲しみ、痛み」を意味する言葉です。それを英語化したものがdolorousであり、人名化したものがドローレスという名前です。

悲しみや痛みを背負う役割が、ドローレスでした。

Prologue dear you who woke from a

そろそろ目を醒ましてみたらどうだろう。

夢から現へ。幽玄なる孤島の霧は晴れた。

幕開けは今から。終わりはない。

Prologue dear you who woke
from a wonder

暗闇の中のまどろみに、何か長い夢を見ていた気がする。重い目蓋の奥では、まだ御伽噺のような夢の欠片が転がっているようだ。明確に掴むことはできないが、夢の残滓は確かにそこにある。

ゆっくりと、目蓋を持ち上げる。からからに渴いた喉で、搾り出すように呼びかけた。

「……パパ」

「なんだい、ロリータ」

耳を打つ優しいテノールに、ドローレスはほっと息をついた。何故か、とても懐かしい気がする。まるで長い間会っていなかったかのような。

「パパは、私のことが好き？」

「もちろんだよ、ロリータ。愛してる」

彼の囁いた言葉はその熱っぽさを反比例して、酷く空虚に聞こえた。空っぽの愛の中に、ドローレスは潮の香りを感じた。彼の想いの源は、消えず確かにそこにあるのだろう。

「ねえ、パパ」

だからこの想いは、きつと嫉妬なのだろう。愛する母を父に取られ、慕う父を少女に取られた苛立ち。その想いの積み重ねが、長い長い不思議な夢を見せた。

けれどももう夢は醒めたのだ。積み重ねた想いは、夢の中で解けて消えてしまった。淡い淡い蝶の夢は、途切れて現実へと帰ってきた。少女の想いは、儂く無残に終わったのだ。

彼女の夢は、散り散りに終わったのだ。

「家に、帰りましょう」

その言葉に、彼は一瞬体を強張らせた。この夢のような旅の終わりを告げる言葉。抱きしめる力が強くなり、鈍く痛みを感じた。彼はまだ、夢を見ていたのだろうか。

たとえ母が居なくても、おぞましい思い出に溢れていても、ドロレスが帰るのはあの家だけだ。そこにはきつと、ドロレスの望んだものはないだろう。夢にまで見た家族はもう二度と手に入らないのだ。けれど。

ドロレスはまっすぐに父を見上げ、ゆっくりと微笑んだ。

愛すべき現実には、そこにある。

P r o l o g u e d e a r y o u w h o w o k e f r o m a

タイトルは『不思議から醒めた君へ』

絵本の最初とかに載っている、アレをイメージしました。

これにて、『不思議の国のドローレス』は完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7868j/>

不思議の国のドロレス

2011年7月30日22時28分発行